

Title	バルザック 『知られざる殉教者』 : 解題と翻訳
Author(s)	村田, 京子
Citation	国際文化. 2002, 3, p.66_a-9_a
Issue Date	2002-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/1085
Rights	

かけているじゃないか。この雄羊が単なる動物に過ぎないとすれば、人間は、その哲学的な馬小屋の中で、最もきれいなお馬を諦めなくてはならないだろうな。

学生たちがオデオン通りに出てくる。学生①「何だって?」。学生②「ああ!」

されてしまったのです...

チャーエルン：そして、ジャン＝パウル¹²⁴の有名な夢の中のように、嫌な顔をされるんだね！

本屋：おやおや。

テオフィル：もうずいぶん夜もふけた。さようなら、皆さん。

ファンタスマ：アイルランド人の言う通りだ。もう帰らねば。(立ち上がる)

ラファエル (チャーエルンに)：今夜の話全体の教訓は、唯物論的な分析によっても、唯心論の名においても同様に、私たちは不滅であるということだよな？

チャーエルン：我々、我々が！すなわち、私たちの基本的な実体がね。それに、そうだからといって、私たちの実体がどこに向かうのか、何世紀にもわたって尋ねてきた好奇心の強い者たちの疑問が解けるわけではない。それが魂であれ、ガスであれ、何かの役に立たねばならないんだ！

グロドニンスキー (カフェの戸口で)：昔、一頭の年老いた雄羊がいたんだ。その羊は、自分の話が皆によく聞こえるよう、後ろの2本足で立ち上がり、よく知られた最も由緒ある羊の群れの一つの真ん中にたって、次のような素晴らしい言葉—それはこの哀れな動物の聖なる言い伝えとなったのだが—を言った。「兄弟たちよ、我々の運命がどれほど偉大なものかご覧なさい。我々は、4つ足動物の中で最も素晴らしい将来を手にはしていないだろうか。というのもつまり、人間の一部になることで我々は、不滅の知性になるのだから。だから、死にはしないと確信して、勇気を持って牧草を食べ、迅速に丸々太って、全てが喜びと幸福である、人間の光の領域により早く入れるようにしようじゃないか。そこでは、我々はそれぞれの功德に応じて報われるであろう。」この雄羊は、雌羊たちにおいて、いまだに神格化された羊とみなされている。その神のしもべ (=雌羊) たちの羊毛を現に君たちは肩にひっ

124 Jean-Paul Richter (1763-1825)：ドイツの著名な作家。スタール夫人が、『ドイツ論』において、ジャン＝パウルの『夢』を翻訳してフランスに紹介した。Fargeaudによれば、先のフィジドールの幻覚の描写も、『夢』からの借用と思われる。

を3度自分の方に引きつけたダミアン¹²²に納得がいったのです。それ故に、思考とは「生きた力¹²³」ではないだろうか、と私は自問しました。それから、窓越しに社会全体を一瞥すると、別の多くの殉教者たちに気づきました。考察を深めるにつれ、人間の法律における大きな欠陥、恐ろしい欠落が見えてきました。すなわち、全く精神的な次元での犯罪が法律に欠落しており、それに対して何の抑制もないのです。その犯罪は何の痕跡も残さず、思考のように捉えがたいものなのです。私は、復讐の手だてのない数限りない犠牲者たちに気づき、家庭の内部で極秘理に、冷酷な心の持ち主が優しい心根の者に加える、この恐ろしい責め苦に気づいたのです。この地獄の責め苦のために、多くの罪のない人々が死んでいくのです。あんなに仰々しく処刑台に連行される街道の殺人者は、哲学者の眼には、その過ちにおいて、辛辣な言葉で拷問を与える多くの者に比べれば、罪も軽いように見えると思えてきました。彼らは、ある人々の心の中で、気高さ、信仰、偉大さによって傷つきやすくなった場所を試した後、そこに始終矢を打ち込む者たちなのです...

テオフィル：ねえ、それがセインツなのです！

フィジドール：私は、苦痛がどこに打撃を加えるか見ました。そして魂の苦痛を。思ったのですが、神は...

本屋：ああ、事態は悪化していきますね。

フィジドール：突然、悟ったのです。私は、その結果が世間にあまり評価されることのない、この秘かな戦いの中に、社会観察の永遠の主題を見いだしました。このような瞑想は、私の中に奇妙な現象を引き起こしたのです。一瞬の間、私は夜中に、大平原の中にいるような気がしました。星と月の鈍い光のもとで、不幸な者たちの靈魂が墓から起き上がり、正義を訴えるのが見えました。彼らにとって、人生は精神的な拷問によっておぞましいものに

122 注75参照。ダミアンは、怪力の持ち主で、四つ裂きの刑の執行に50分かかったと言われている。

123 『ルイ・ランベール』でも、バルザックはランベールを通して「意志 la Volonté」、「思考 la Pensée」は「生きた力 (forces vives)」であるとし、「この二つの力は言わば、目に見え、触れることのできるものである」(Pléiade, t.XI, p.631)と述べている。

くては」と私は彼に言いました。「でかした！」と老医師は叫びました。「よくわかったね。でも、思考器官のいかなる損傷も—そこから思考の不活発が生じるのだが—死をもたらすものだ。一般的な問題には、細部の問題が多く存在しているんだよ、まあね。巷を賑わしている、驚異的な百歳の老人たちの生活条件を私自身で調べるために、北欧に行ったわけではない。だが、超自然的な長寿の例が過去に幾つもあった。とはいえ、反証を持ち合わせていないわけではないんだ。私はルイ14世治下の1696年に生まれた男を知っている...。」私は疑いと驚きを露にししながら、老人を見つめました。彼の戯言は、私には狂気に達しているように思えたのでした。「君は、かまどの口みたいに、眼を大きく見開いているな」と彼は言いました。「そう、その男は今127歳¹²⁰なんだ。しかも彼は一度も思考したことなかったんだ！」この言葉の後、老人はこの事に関してもう何も言いませんでした。知性が彼を見捨ててしまったのです。おそらくこの会話でさえ、ランプが放つ最後の光であったのでしょう。というのも、彼は翌年亡くなったからです。そして、デュコルミエさんの話では、彼が首尾一貫した話をしたのは、年に2度もなかったそうです。この長談義の後、彼は桃の木の刈り方について私に語り、夕食を持って来るよう頼み、私に取りとめもない事について、ちょうど子供がするように質問しました。彼は、私の時計が彼のと一致しているか見たがりました。とうとう、彼は（知性において）より高く登っただけにより一層下に落下してしまいました。白状しますが、この奇妙な会話によって私は激しく心が揺さ振られました。ロワール川沿いに帰り道を辿りながら、私はこれらの事実から結論を引出し、もし思考がこのような力を持つならば、肉体的な苦痛を耐え忍ぶ大きな拠り所を与えてくれるはずだと考えました。このようにして、パリス司祭¹²¹の奇跡や殉教者たち、四つ裂きにするために鞭を当てられた馬たち

120 バルザックはこの対話を1821年に設定していたので、1696年生まれの男は実際はこの時点では125歳のはずである。

121 François de Paris (1690-1727) : ジャンセニスムの助祭。同派を異端とした回勅 (la bulle Unigenitus) に反対。彼の死後、彼の墓を詣でると、病気が奇蹟的に治るといふ噂がたち、大勢の人が奇蹟にあずかろうと押し寄せた。

ず、彼は床に落ちていた2スー硬貨に気づいた。その硬貨には、「フランス共和国」と、束桿の上に「自由」を表わすフリジア帽が描かれていた。彼は自分がルイ16世の御世にいると思い込んでいたというのに！製造年号が1793年のこの硬貨について、彼が無数の思いを巡らしていたちょうどその時、私が到着した。私は、これはローマ硬貨だと主張して、骨董屋の口上で彼を欺こうとした。しかし、彼は皮肉な様子で、「(ローマ硬貨は) フランス語で刻まれているのかね」と言って、私の手からその硬貨をもぎ取った。彼はこの種の病人は皆そうであるように、尋問の天分と、ある種の欺き難い推察力を持っていた。彼自身や彼の病気に関することであればいつも、私は彼を、私の望む通りにできた。しかし、もし私たちがドイツとの戦争について話をし、ある点に関して彼に反論しようとしたならば、彼は私を完璧に打ち負かしてしまっただろう。私の嘘は彼を欺く力を持っていなかった。というのも、彼がしきりに何度も繰り返す「国王に王妃、王太子に親王たちはどうなったのか」という問いに答えることができなかったのだから。彼に、様々な事件の恐ろしい全貌ではなく、国王の死を知るための心準備をさせねばならなかった。しかしながら、王座が空位であるわけにはいかなかった。様々な質問に急き立てられて、私は彼に、真相をぼかしながら告げざるを得なくなった。私の語る一言一言が、決定的な一撃となった。私は彼を車刑¹¹⁸に処したようなもので、死が彼を捉えるのが見てとれた。私のあらゆる努力にもかかわらず、彼に王妃が処刑されたことを告げると、彼は「王妃もまた！」と叫んだ。こんな叫びを私はいまだかつて聞いたことがない。年老いた王党派は頭を肘掛け椅子にもたせかけて事切れた。これが、私に最も衝撃を与えた3つの事件なのだ。1797年から1810年にかけて、13年間でその証拠は十分集まったのだが...「でも、あなたの学説が真実であるためには、反証が必要でしょう、即ち、思考が不活発であったための長寿¹¹⁹の例を幾つか観察したというのでな

118 殺人、強盗に対する刑の一つ。受刑者は四肢、胸を鉄棒で折られた後で、宙ずりの車に縛られ息絶えるまで放置された。

119 バルザックの父親の長寿願望は有名で、バルザックも影響を受けた。また、1830年頃、長寿に関する研究が流行した。バルザックは、思考の行使によって早死にしたルイ・ランベールの対極の人物(100歳まで生きた白痴の男)の物語(*Ecce homo*)を構想していたが、未完に終わる。

まにしておいておくれ。ド・ボメール氏は国王と王妃に対して非常に愛着を抱いており、この2人の人物のみを心の糧にして生きていた。王家に害を及ぼすことであれ、王家に不幸なことであれ、それを彼に告げることは、彼に致命傷を負わせることだった。彼の狂信は、ほとんど精神錯乱に近かったのだ。彼は自分のためには祈ることはなく、まっとうなヴォルテール主義者として、神を全く信じてなかったが、天国で国王に関して何か起こった場合を仮定して彼らのために祈っていた。1793年の時点で、彼は国王と王妃がヴェルサイユ宮殿で元気に暮らしていると信じていた。王または王妃の死に関するほんの少しの知らせでも、彼に突然死をもたらすと確信していたので、私は彼が、当時の政治情勢について全く知らずに暮らせるよう万全の態勢を取った。彼に宿替えをさせた。彼は、サン＝ヴナン広場の持ち家の中で、通りに面した部屋に住む代わりに、庭に面したアパルトマンに居を定めることになった。私が彼に、ほんの僅かな物音も彼の健康には悪いと言ったその日に、彼は下宿人たちを追い出してしまった。彼に対して、外へ出る散歩は一切禁止した。召使女に予め言い含め、彼の思い違いをなくしてしまう可能性のあるものは全て避けてきた。ある日などは、私がいなければ、彼はもう少して死ぬところだった。彼は、「強制公債¹¹⁶」に関わるかなり多額の金を召使女がどうして、そしてどのように支払ったかを知りたがった。彼がこの気の毒な娘をあまり厳しく叱りつけたので、彼女はトゥール・コミュニケーションの通告を彼に見せようとした。それには、「フランス共和国、革命暦2年¹¹⁷、自由、平等」と書いてあり、「市民ボメール」宛になっていた。非常に幸運にも、ちょうどその時私が入っていき、彼に、あまり怒ると彼の命取りになるだろうから、私が彼の代わりに勘定を確かめてあげようと申し出た。それ以降、私が彼の財産を管理するようになった。私たちが細心の注意を払ったにも関わら

116 emprunts forcés：政府が、ある階級の市民に課す特別税で、ある所定の時期が来れば利子をつけて、または無利子で徴収した元金を返却するもの。1793年5月、6月、9月の3回にわたって、強制公債に関する政令が布告された。

117 ジャコバン独裁期（1793年10月5日）に、フランス紀元は、キリストの誕生から始まるのではなく、1792年9月22日のフランス共和制の誕生から始まるとして、革命暦が定められた。

わる用い、普段は到底持ち合わせていない一種の天分を様々な形で繰り広げながら、人を怖がらせようとしていた。私は最後には、この病気は神経系にその原因があり、知られざる損傷のために、この哀れな男が嘆くあらゆる苦痛を代わる代わる与えているのかもしれないと思うようになった。私の考えの根拠となる理由や観察事実を述べるとするならば、一冊の本が書けるくらいなので、君にその全貌をここで語ることはできない。「今話すべきではない」と彼は微笑んで、嗅ぎタバコを一服吸いながら付け加えました。「私が深い驚きを持って観察したことはね、君」と彼は再び話しました。それはその重大な証拠が2つしかないが、ド・ボメール氏においては、毎日生じていた事、すなわち、思考の有害性ということだ。彼の脳、魂、心、感情、知性（私の考えでは、これらの言葉は一つの同じ物の様々な面を表しているのだが）、つまり、彼の肉体的な力以外の全ての力（だが、精神的な力は、どこかの器官を緊張させ、そこに全てを凝縮することによって、肉体的な力を吸収するものではなかろうか。それは脳髄なのか。大交感神経なのか。今では、私の知性がすっかり錆付いてしまって、自分自身の学説をまとめあげることができなくなってしまった。）それで、彼の力の総量が、ある思考によって一点に集められた時、私は彼の命を手中にし、一言で彼に死をもたらすことができた。私は魔術師のようであり、モーゼの杖を手にしていただろう。彼は自分が死に瀕していると思っていたのだろうか。もし私が彼に「聴罪司祭を呼びなさい」と言ったならば、彼はたちどころに死んでしまっただろう。彼の生命は、眼に見える炎であり、それを吹き消すことも、火を煽ることも私の思うままだった。ある状況のもとでは、「いいえ」または「はい」という一言が、心臓に向けたピストル射撃のようなものになっただろう。彼の「意志」、人間のこの素晴らしい特性はもはや彼のものではなく、私のもので、私はあたかも私のものであるかのようにそれを操ることが出来た。要するに、私は「彼」であったが、彼は「私」にはなれなかった。こんな奇妙な状態がよくわかるかね。今は、このダモクレスの頭上の剣¹¹⁵を吊るしたま

115 ダモクレス（前4世紀のシラクサの僭主）の頭上に、ディオニュシオスが馬の尾毛で結わえてつるした剣。絶えず身に迫る危険の比喩。

て、傷つきやすくなっていた。しかし、精神的な条件の方が、死が思考に導かれて侵入するのにもっと適してはいないだろうか。その証拠がたちまち現れた。私は、ある年老いた紳士を治療していたが、彼はルイ15世治下に従軍した後、手に入れたものは悲しみだけだった。彼は戦場でひどく苦しんだにもかかわらず、その奉仕は世に認められなかった。彼はリシュリュー公¹¹²に仕え、アメリカではロシャンボー伯¹¹³と一緒にいたんだ。ド・ボメール氏は、彼の受けた数々の負傷や数々の辛酸の見返りとして、聖ルイ勲章¹¹⁴を授かっただけだった。それも温情によって、しかも、マリー＝アントワネット妃の推薦によるものだった。この気の毒な紳士は、サン＝ヴナン広場の小さな家で慎ましく暮らしていたが、彼があまりに手に負えなかったために、世間から次第に見捨てられてしまった。晩年には、召使たちも彼から去っていった。ほとんど耳の聞こえない年老いた召使女が彼のもとに残った。というのも、彼女は彼の話の4分の3しか聞こえなかったからだが、それでもある日、彼女もまた出て行きたいと言いだす始末だった。この気の毒な男は、極度の心気症だったんだ。これほど進展した心気症の患者を私は未だかつて見たことがない。彼は半日の間に、何度も気分が変わり、彼の神経は苦情を拡大し、それに変化をつけることのみで費やされた。彼を観察していた私としては、そういった泣き言が妄想によるものだったと断言することはできない。それほど彼は自分の痛みを明確に語り、その理由をまことに巧みに私に説明してみせた。君も分かるだろうが、私は彼の辛辣な、しばしば哀れっぽい激情から免れた唯一の人物であった。というのも、彼はあらゆる役柄を演じ、あらゆる手段を尽くして、自分を苦しめる内的作用を表現しようとしていた。時には、自分の苦痛を物語ることによって同情をひこうとし、時には、子供の茶目っけ、役者の芸、男の強さ、革命家の激しい怒りや女の忍従を代わる代

112 Le maréchal, duc Armand de Richelieu (1696-1788) : オルレアン公フィリップの摂政時代 (1715-1723) とルイ15世時代 (1723-1754) に活躍した元帥。バルザックは度々『人間喜劇』の中で彼に言及している。

113 Jean-Baptiste Donatien, maréchal-comte de Rochambeau (1725-1807) : アメリカ独立戦争の時にフランス軍を指揮した元帥。

114 Ordre royal et militaire de Saint-Louis : 1693年ルイ14世によって創設された軍功章。1792年廃止された後、王政復古期に復活 (1814-30) した。

殆ど全てが、「水気を帯びた¹¹⁰」—私の考えを理解する助けとして私が拵えた語なのだが—脳髓の持ち主だった。すなわち、彼らは皆、思考が緩慢な、湿った脳髓の持ち主で、皆、機械的な労働と、火に殆ど油を注がない、質素な食習慣を身につけた者たちだった。というのも、上流社会では、栄養過多でリン酸を含み、それが身体組織に刺激的な成分をもたらしているから。それらの成分は、組織の動きを加速し、思考にとっても行為にとっても、過剰の力を生み出させてしまう。我が百歳の老人たちは、人夫か農夫たちで、少量の、栄養分の少ない物を食べて生命を維持し、生命を刺激しないようにしてきた。私はこの大原則の適用例を探してみた。君の父上がよくご存じのマリエット氏は、今の医学では治療不可能な病気に罹っていた。すなわち、彼は脳軟化症だった。このような場合、死は狭心症と同様に、突然起こる。あまりに激しい思考や、デグランジュ氏を死にいたらしめたような知らせが、死を決定づけることがある。私はマリエット氏に注意を怠らず、彼を診察しに毎日訪れ、彼の病気の症状、例の腕の痙攣や、脳の冒された部分に関係した上腕骨の特有の重たさを観察していた。この老人には軍隊に所属する一人の息子がいた。その息子は、共和国への裏切りを疑われたある将官付きの副官だった。彼は、この哀れなキュスチーヌ¹¹¹と一緒にパリに召還され、2人とも告発され、死刑の判決を受けて処刑されてしまった。私はこの知らせを父親のマリエットに隠しておくよう忠告しておいた。しかしある朝、彼を見にいくと、隣人の一人が彼を慰めにやって来て、死者の墓穴を大きくするような婉曲的な悔やみの言葉を述べようとした。私は、彼に黙るよう合図をしたのだが、彼が出ていった後、老人は一体何のことか知りたがった。私がそのことを彼に告げると、彼は雷に打たれたかのように死んでしまった。デグランジュ氏とマリエット氏のこの2人は、いわば、ある肉体的な条件によっ

110 hydriatique : ギリシア語で「水」を意味する語に関連した «hydr» という接頭語を使い、「hypocondriaque」のような形容詞にならってバルザックが作った造語。

111 Le général Adam-Philippe, comte de Custine (1740-1793) : フランス革命期の将官。フランクフルトをプロシア軍に明け渡し、マインツ、リールで不十分な防衛手段を取り、将官の独裁を請願する手紙を書いたかどで、公安委員会によって、パリに召還され、逮捕された。彼は革命裁判所によって死刑の判決を受け、1793年8月28日に処刑された。

りいかなる激しい動きもたちまち、死をもたらしてしまう。私は彼に、風邪を引かないよう、火の隅でじっとしているように勧めておいた。1789年の冬だった。風邪を引いて咳き込めば、激しい動きに見舞われたらろうから。それで、この世ともおさらばだ！この老人はお金が好きで、子供たちよりも金に執着していた。「子供は作ることができるが、私の財産を作り直すことはできないからな」とよく言っていた。彼は嘲笑的な男だったんだ。彼の姪のルールソン夫人が私の目の前で、うかつにも彼に、王室財政総監が倒産したと告げに来た。デグランジュは、彼に自分の蓄えを預けていたんだ。ばたん！私の患者は、一言、一つの思考によって、あたかも雷に打たれたかのように死んでしまった。彼は、叫びもしなければ、蒼白くもならず、微動だにしなかった。ほんのわずか、片目が痙攣しただけだ。こんなに素早く死が作用したのを今まで見たことがない。デグランジュはこんな風に、生命と健康に溢れたまま死ぬだろうと20年前から私は予言していた。ここでは、私は偉大な医者、魔法使いとみなされてきた。わかるかね、君、ずいぶん前から私にとって、思考の非物質性は、ぷっと吹き出すような－もちろん、内心でだが－馬鹿げた事だった。私にとって、思考は重さを量ることのできない性質を持つ一つの流体で、私たちの体内に循環組織を持ち、その静脈も動脈も持っているのだ。それが、あるただ一つの点に多量に流れ込むと、ライデン瓶¹⁰⁹のように作用して、死をもたらす可能性がある。人は、ある精神的な動きによって、その流体の源を涸らすことがある。その動きは、下脛動脈が開くと、血液の源が涸れるように、全てを消費してしまう。私たちの身体組織に潜むこの火は、調節することができる。思考の力をよく使えば、あまり生きられないだろう。全然思考しなければ、長生きできるだろう。私の実験を立証するために、私は50里四方を走り回って、私の知っている百歳の老人たちの死に立ち会ってきた。15年間で、恐らく60人の百歳の老人たちを調べたと思う。

109 bouteille de Leyde : 初期の蓄電器。オランダのライデン大学で1746年に発明され、静電気の研究（特に雷の研究）に活用され、ヨーロッパ中に大きな反響を呼び起こした。

たの死者たちは、どう答えたのですか。」彼は身震いし、思考の脈絡を取り戻した様子でした。「君にある秘密を明かそうとしていたのだったね。これがその秘密なんだ。思考は肉体よりも強く、肉体を貪り、飲み尽くし、破壊してしまう。思考は、破壊の全ての要因の中で最も強烈で、人類を皆殺しにする天使¹⁰⁸なのだ。思考は、人類を殺し、蘇らせる、というのもそれは、生かしても、殺しもするからだ。この問題を解決するために何度も実験を行なった結果、次のように確信するようになった。生命の長さは個人が思考に対立できる力に比例しており、その拠り所は、気質にある。思考を行使したにもかかわらず、高齢に達した人々は、この人殺しの力を使わなければ、3倍長生きしたであろう。生命は、灰で覆わねばならない火なのだ。思考するとは、君、火に炎を加えることだ。百歳を越えた殆どの者は、手仕事に従事して、殆ど考えることをしなかった者たちだ。「思考」とはどういう意味か知っているかね。様々な情念、悪徳、激しい不安、苦悩、快樂が思考の奔流なのだ。ある一点に幾つかの激しい観念を集めてごらん。人は、あたかも短刀の一撃を受けたかのように、それらによって死んでしまう。ある日、私は親友の一人のデグランジュ氏の枕元にいた。デグランジュ氏を知っていたかね。彼は狭心症にかかりやすかったのだが、ここの誰もそのことについて何も知らなかったのだよ。この病気の症状をよく知るには、偉大な臨床医でないといけないのだ。心臓は、私たちの血液がそこに流れ込む一つの器官だが、器官としてそれは、特に血管によって養われており、血管が、心臓自身のために必要な血液を心臓に与えているのだ。心臓には専用の、養分を供給する支流がある。足や脳髄、手がそれぞれ専用の支流を持っているように。心臓を養っている2つの血管が閉塞すれば、心臓は自分のための血が足りなくなり、そうなるとその動きは止まり、患者は突然、何の苦しみもなく、くたばってしまう。これが狭心症というものだ！デグランジュ氏がどういう状態にいたのかわかるね。このような状態では、上り下りの動きや、声のトーンを上げた

108 Ange exterminateur : 出エジプト記における「滅びの天使」。ユダヤ民族を苦しめたエジプト人に罰を与えるため、エジプト人の第1子を皆殺しにするために神が遣わした天使。

たものが、マジスム¹⁰⁴なのだ。マジスムを魔法と混同してはいけないよ。マジスムは、事物の本源的意味を発見しようとする高等科学であり、自然現象が、いかなる細い糸によってそこに結びついているかを追求する学問なのだ。」

グロドニンスキー：フランスではいつか、スウェーデンボルグ¹⁰⁵の万物照応（コンコルダンス）に行き着くことでしょう。

フィジドール：「この世の全てのものがそれぞれ、効力、すなわち力を持っているのだよ。ストリキニーネの木もプロヴァンの薔薇¹⁰⁶も、大理石も人間も同様に。わかるかな。すなわち、これらの力は互いに照応し合い、幾つかの中心に向かっているのだ。わかるかね。マジスムは、これらの力の進行を明らかにする学問なのだ。だから、私たちはそれを使うことで、魂を見ることが出来るのだ。」私はこの不十分な言葉を聞きながら、いわば呆然としていました。これらの言葉は、思考の闇にも似て、光を思い起こさせ、もう少しで全てが明晰になりそうでした。私の眼のあり様を見て、老人は私の心の緊張に気づき、私に微笑みながら言いました。「そのことは置いておこう。私はあの気の毒なサン＝マルタン¹⁰⁷にだけ、その話をしたことがある。彼は自分が死ぬに任せてしまった。この種の知識を持っていたのに。私たちはインドに行く計画を立てたが、彼はトゥーレーヌ人にしてはあまり積極的ではなかったんだ。」「ところで」と私は話を元に戻すために言いました。「あな

104 magisme はもともと、ゾロアスター教におけるマジの教義を意味するが、バルザックは magie と区別するために、彼独自の意味を付与して大文字 (Magisme) で使っている。

105 Emmanuel Swedenborg (1688-1772) : スウェーデンの著名な神秘思想家。鉱物学、物理学、数学、天文学を究めた後、神の啓示を受け、霊界についての多くの書物を著す。彼の万物照応説（自然界の全事物、現象は霊界と相互に関連しあい、影響を与え合うという考え）は、バルザックを始め、ネルヴァル、ボードレーン等19世紀の文学者に大きな影響を与えた。

106 パリ南東にある郡庁所在地 Provins 地方名産の薔薇で、伝説によれば、12世紀に当時の領主 comte de Champagne Thibaut le Chansonnier がパレスチナから赤い薔薇を持ちかえり、それが「プロヴァンのバラ」という名で有名になったと言われる。

107 Louis Claude de Saint-Martin (1743-1803) : フランスの神秘思想家で、イリュミニズム（神の直接的啓示に基づく真理を重んじる神秘思想）の代表的人物。トゥールの東、Amboise 生まれ。

すのだよ。しかし、能力は形を呼び起こすのだ、君。死者の世界に到達するには、手に緑の小枝を持ち、白い服を身に纏わねばならない、というのは作り事だよ、君。それは、形相と種を超越するために、人が身を置かねばならない状態を描いたイメージなんだ。白い服は節制、禁欲、純潔を表し、それらは生命を延ばし、力を常に生き活きと、常にみずみずしく保つ。小枝はその見事な成果、これらの性質から生じた美点のシンボルなのだ。『常に生き活きとあれ』だ！今日では、象形文字はエジプトの大理石にはもはや刻まれていないが、生きた言葉である神話の中にある。神秘学を信じなさい。大多数の人はそれを否定するが、これほど自然なことはないのだよ。神秘学は、人類でもごく少数の人々にしか知られていない。ちょうど、森の中で他の木々が落葉している時に、まだ青々としている木々のようなものだ。ベッヒャー⁹⁹、シュタール¹⁰⁰、パラケルスス¹⁰¹、アグリッパ¹⁰²、カルダーノ¹⁰³は人に理解されなかった者たちの一員なのだ。あの錬金術師たち、金を作ろうとしていると非難された者たち全てと同様に、彼らも理解されなかった。金を作ることは、彼らの出発点に過ぎなかったのだよ。この年老いた学者の言葉を信じなさい。彼らはもっと素晴らしいことを探求していたのだ。構成分子を見つけようとしていたのだよ。彼らは、運動を、その本源に遡って見いだそうとしていた。無限に小さい粒子の中から、その働きがちらりと垣間見られる、普遍的「生」の秘密を彼らは捉えようとしていたのだ。これらの学問をまとめ

99 Jean-Joachim Bécher (1625-1682) : ドイツの著名な化学者。彼は、卑金属から金に変容する可能性を信じていた。

100 Georges-Ernest Stahl (1660-1734) : ドイツの著名な医者、化学者。医学におけるアニミズムの体系を作りだし、肉体は全く不活性で、全ての病気は非物質的な「魂」の介入によって説明できるとした。

101 Philippus Aureolus Paracelsus (本名 : Theophrastus Bombastus von Hohenheim) (1493-1541) : スイスの著名な医者、化学者、哲学者。青年時代に医学、錬金術、妖術を修め、人間をマクロコスモスの中のミクロコスモスとみなし、秘術による自然の把握を説いた。

102 Agrippa von Nettesheim (本名 : Heinrich Cornelius Agrippa) (1486-1535) : ドイツの著名な錬金術師、哲学者。神秘学の熱心な信奉者で、接神論的、秘術的思想の持ち主。

103 Girolamo (Geronimo) Cardano (1501-1576) : イタリアの自然哲学者、医者、数学者。3次方程式の解法で有名。

い？」何かしら人の良さにからかいの入り交じった調子で、老医師がこれらの問いかけをした後、彼は私を部屋に招き入れ、私たちは暖炉の前に座りました。

「ということは、私があなたの戸口でノックしてあなたを呼んだ時、あなたは私に気づきもせず、私の声も聞こえなかったのですね」と私は彼に尋ねました。「ああ、もちろん、聞こえたとも」と彼は私に言った後、少ししてから「科学は進歩しているかね」と尋ねました。「でも全ては進歩するものですよ」と私が言うと、「いいや」と彼が答えました。彼は素早く人差し指で空中に円を描いて言いました。「昔の人々は正しかったよ。これが世界だ。」私が記憶する限りでは、この仕種ほど黙示録的なものを今まで見たことはありません。それは、この90歳の老いさらばえた、骨と皮ばかりの老人とびったり釣り合っているように私には思えました。彼の眼は一瞬、恐ろしい光を取り戻しました。「君は若い」と彼は私にぶっきらぼうな友情に満ちた眼をしながら言いました。「君の父上をよく知っているし、君が子供の頃は君の面倒を見てやった。君を自分の息子のよう愛している。だから、他人には決して打ち明けないことを君に言えるのだ。だって、君は私に悲しい思いをさせることなど望んでいないだろうから。私が中庭で、敷石の下に何を見ていたか、知っているかね。今朝、そこから死者たちが立ち上がり、彼らと私はお喋りをしたのだよ。彼らは私が診察し、その臨終を看取った連中で、彼らにとって科学は無力だったのだが、彼らに対して（このことは誰にも言うてはいけないよ）、重要な実験を試してみたのだよ。私は彼らの死を意識に留めておかないといけないのだろうか。それを彼らに問うために、死者の霊を呼び出したのだ。」「ということは、あなたは亡霊の出現を信じているのですね」「その通り」と彼は確信を持って言ったのです。「確かな証拠があるんだよ。」「でもそんな出現は、どうやって起こりうるのでしょうか。」

老医師が私に答えました。「ねえ、もし何も物理的には消滅しないとするならば、いわんや、諸々の本質、性質、諸力は残っているはずだ。観念は、肉体の生よりもより永続的な生を持ってはいないだろうか。様々な能力は、一つの生から他の生へ伝えられるものだ。だから、死者の霊を呼び出すことのできる者は、彼らの形ではなく、彼らの能力のうちに、彼らを再び見いだ

在すれば、田舎の素朴で静かな生活の値打ちがわかるようになります⁹⁷。昔は、このような光景は私にとって何の意味もありませんでした。この光景によって、私の恐怖は一瞬紛れはしたものの、まもなく、私と気づかずに私をじっと見つめ、相変わらず微動だにしない主人の様子を見て、その恐怖は更に募るばかりでした。彼は死んでいるのか、そして、完全な均衡を保って、立ったまま冷たくなってしまったのだろうか。私はますます当惑しながらじっとそこに立ちすくんでいました。その時、帽子を被り、トゥーレーヌの女性特有の毛皮つきコートにくるまった一人の女性が、祈祷書を手にミサから戻ってきて、ミュリエ通り⁹⁸に姿を現しました。彼女は私が戸口にいるのを見て急いでやって来ました。老医師の家政婦のデュコロミエさんはすぐに、私だとわかりました。しかし、彼女の叫び声も、私たちの交わした会話も、夢から医師を引き離すことはできませんでした。「一体ご老体はどうしてしまったのですか」と私は彼を指し示しながら、彼女に尋ねました。「もちろん、彼はとってもお年寄りなんですもの。仕方ないじゃないですか。彼は殆ど子供のようで、何時間もの間ずっと、家の敷石や階段、部屋のタイルをじっと見て過ごすのですよ。彼が考えることと言えばそんなことですよ！」私は中に入って、父の旧友に挨拶をすると、彼は私の手を取り、それを彼の手の中に包み込んで、私をじっと見つめました。彼の注意は私という人間と、彼が思いめぐらしている思考との間で迷っていました。「ああ、君だったのか」とやっと彼が言いました。雪の中のオーロラにも喩えられるような、老人特有のあの微笑みの一つを浮かべながら。彼は私の手を叩きました。「パリから来たの？」「はい」と私は彼に答えました。「君は立派な学者になって戻ってきたかい？偉大な医者になるために必要な知識を学んだかい？たった一つのことです。胃と脳を一致させること。そのこと知ってるか

97 喧騒に満ちたパリと平穏な田舎との対立は、『人間喜劇』の一つのテーマとなっている。とりわけ、『地方生活情景』の中の『ウジェニー・グランデ』では、シャルルの象徴する都会パリと、ウジェニーやペール・グランデのソーミュールの田舎との対立が描かれている。

98 トゥールのこの通りは、Bretonneau 通りと Briçonnet 通りをつなぎ、Tristan の家がある

しに彼が見えたので、彼の名を呼べば、呼び鈴を鳴らさなくてもすむと思いました。というのも、彼は天井の低い広間の戸口にいたからです。彼が返事をしなかったため、私は呼び鈴を強く鳴らしました。しかし、彼は身じろぎもせず、広間の戸口でじっと突っ立ったままでした。中庭はとても小さかったので、私たちの間はたった2、3トワーズ（約4～6メートル）の距離しかありませんでした。黒ラシャを着ているために、白髪が際立って見えるこの背の高い老人をまじまじと見つめ、目を見開いたまま、身じろぎもしない彼を見ていると、私はぼんやりとした恐怖に駆られました。彼は亀裂の入ったこの古い住まい同様にうらぶれていました。この家にはブドウ棚が取り付けられており、そのブドウの枝がドアのまぐさ石⁹⁶の上を走って老人の顔を撫でていました。私が子供の頃から知っている家具や白いタイル、木の暖炉が見え、穏やかな日差しが一杯差し込んでいる広間の薄明かりが背景となって、彼の姿がまるで肖像画のように、くっきり浮かび上がっていました。2階には、ブドウの若枝が巻きついた、ひびの入った古い手すり子（手すりを支える小柱）のある木の回廊が広がっていました。この回廊の端から端へ、洗濯物を干すためにロープがピンと張り渡されていました。そこに通じる階段は外についていて、庇によって雨から守られ、医師の小さな庭に面した側壁に沿ってありました。この階段によってできた四角い部分の下には、15年来使っていない古いカブリオレ馬車や、きちんと並べた薪、柴の束、樽、古い酒樽や、屋根の修理のためのスレートが置いてありました。小さな庭は、木の柵で囲まれ、そこからツゲと紡錘形に刈り込まれた果樹に縁取られた畑と果樹牆（果樹の小枝をはわせて作る垣根）、トゥーレーヌ地方のあらゆる塀を飾るこのきれいな綴れ織りが垣間見えました。私が老人の名を呼んだ時と、返事がないのもう一度呼んだ時との間に流れた沈黙の間に、田舎に息づいている清潔さによって一段と引き立った、何かしら人の良さが刻み込まれたこれらの細々したものに、私は見とれていました。田舎では時間をつぶすために、物にも人と同じくらいの手数をかけるのです。パリに少しでも滞

96 linteau：窓、戸、暖炉などの上部に用いられる水平部材。

が神経流体を生み出すように、神経流体が思考を生み出すのです。しかし、両者には濫用がつきまといまいます。この濫用は血液にとっては「病気」と名付けられ、思考にとっては「狂気」と名付けられるものです。

ファンタスマ：それは少し言い過ぎですよ、革新の旗手よ！

フィジドール：しかし、思考が作り上げられる組織に入り込んで、思考を汚染し、損ねる有害な観念が存在しないでしょうか。あなたが先程証明したことは、まさにそのことではないでしょうか。ある人にある適切な病気に罹らせることで、血液の性質を変えることができるように、思考の性質を変えることができるのです。どの医者にも不可能で、すべきでもなく、したいとも思わないこの実験を様々な情念が行い、同様に、様々な狂信が思考に対して別の実験を行うのです。高い視野に立った医者が彼の観察した事をまとめたいと思うならば、次のように描写するでしょう。100歳まで生きるはずだった若者が、どうして30歳で結核で死んでしまったのか、こちらの男は、如何なる濫用によって、もし... だったならば、決して罹らなかったであろう肝炎で死んでしまったのか等と。しかし皆さん、私はあなた方に対して、私の進むべき道がどのようにして決まったのかを、お話ししなければなりません。その後で、私の研究方向に最も大きな影響を与えた事件をお話ししましょう。偉大なヴェザル⁹⁴にも匹敵するような医者が私にした告白をこれからお話ししましょう。その告白は、知性が彼の口に投げ与えた最後の花のようなものだったのです。1821年、私が医学校に入学して以来3度目のトゥール帰省中のことでした。休暇ごとに私は必ず、私の家族の古い友人を訪れることにしていました。彼は、あまりに現実離れしているので、手に触れない限りその存在を信じることのできないような人物の一人でした。この人物は、90歳位の老医者で、サン＝マルタン広場（カロワ⁹⁵）周辺の、ロワール川に通じる狭い通りの一つに住んでいました。彼の家には、下の部分に窓のない小さなドアがあり、上から格子が嵌まっていた。従って、彼を訪問した時、格子越

94 André Vésale (1514-1564) : ベルギーの著名な解剖学者。死体解剖の許可を得るために闘った解剖学の創始者。

95 Carroi : 市場のたっている広場を意味する古い言葉。

何人かのイギリスの学者たちが、この最初のデータを調査し、恐らく、新しい科学用語⁹²がそこから生まれることになるでしょう。

チャーエルンがはたして彼らをかついだのではないかと自問するかのよう
に、一同、驚いて互いの顔を見る。

ファンタスマ：本屋さん、ドミノのゲームは？

しばらく沈黙

グロドニンスキー：ボーイさん、何か新聞を。

フィジドール：皆さん、私はチャーエルンが、偉大な信仰や、立派な学問を馬鹿にするつもりはないと思います。私はそれでもやはり、あなたの実り豊かな研究論文を期待していました。私の学説を立証することのできる事実を探してくれて、どうもありがとうございます。その学説とは、最も簡潔に言うならば、諸観念を一つの流体の産物とみなすもので、その流体は発生においてであれ、そのもたらす結果においてであれ、光の現象との類似性を呈するものです。しかし、注目すべきことは、その流体の有毒で有害な作用しか今のところ、私たちは観察していないのです。

ファンタスマ：ということは、有益で規則正しい作用が、天才と美德をもたらすということですね。

フィジドール：その通り。一つの観念は従って、神経流体の産物であり、それは血液の循環に似た内的循環⁹³をなしているのです。というのも、血液

92 『あら皮』で、主人公のラファエルが、不思議な力を持った「あら皮」を、科学の力で伸ばしてもらおうとするが、どの試みも失敗する。学者たちは「あら皮」を *diaboline* と名づけて満足してしまう。バルザックはここで、「すべての人間の学問とは、名付けること (nomenclature) である」(Pléiade, t. X, p.242) と述べ、学術用語を作りだすだけの学者たちの無力を嘲っている。

93 Fargeaud によれば、フィジドールがここで展開している血液の循環と神経の循環との類似は、とりわけ Georget が彼の著作 *Physiologie du système nerveux* (1821) で、Chartel が *Esquisse de la nature humaine expliquée par le magnétisme animal* (1826) で研究の対象としていた。

あたかも博物学者が哺乳類、昆虫、放射相称動物⁸⁸、体節動物⁸⁹を描写するかのよう、観念を描写するのです。彼の狂気は大評判となりました。イギリスの医者たちは、仲間うちでそれを話題にしました。そのうちの一人は、それはマジャンディ⁹⁰の所から逃げてきた、脳のない犬に違いないと主張しました。当然の成り行きとして、化学者を診ている医者が精神病院の医者に出会いました。「奇人」の医者は、その狂人に術をかけた魔術師は、彼の患者かもしれないと思いました。それを同僚たちに話したところ、彼らの好奇心が大いに掻き立てられました。医者たちは、彼らが化学者の「奇癖」と呼ぶところのものを褒めそやし、彼の書齋と実験器具のある実験室に入る許可を得ました。沢山の広口瓶の中に、精神病院に閉じ込められている気の毒な男の名のラベルがついたガラスの小瓶があるのを見て、彼らの驚きようといったら大変なものでした。彼らは私たち皆が考えついたであろうような実験をしたがりました。彼らは化学者に、彼が取り上げた魂を元の肉体に返してやるよう頼み込みました。化学者はそれに同意し、こう言いました。いつでも好きな時にその魂を再び奪うことができるし、その上、あまりそうしたいとは思っていない。何故なら、その魂はエーテル性実体⁹¹をほんの少量しか吸収していないからと言うのです。しかし、医者たちがびっくり仰天したことには、化学者が気の毒な男の精神を解放した時刻に、この男は自分の魂を再び働かすことができるようになったと宣言し、大いに喜んでいました。現在、

88 左右相称動物の対語。棘皮動物（ナマコ、ヒトデ、ウニ等）及び肛腸動物（イソギンチャク、クラゲ、サンゴ等）を指す。

89 キュヴィエの分類による節足動物と環節動物を指す。

90 François Magendie (1783-1855) : フランスの生理学者。パリ市立病院に勤務、特に、運動神経と感覚神経を区別したことで有名。様々な動物実験を試み、バルザックは、『近代興奮剤考』でも、マジャンディの犬を使った実験（砂糖だけで犬を飼うとどうなるか）に言及している。

91 『ルイ・ランベール』でルイ・ランベールが「エーテル性実体」(Substance éthérée)を万物の根源であるとみなしている。「地上の一切は電気、熱、光、ガルヴァーニ電流、動物磁気などと、適切ではない名前知られている幾つかの現象の共通基盤である『エーテル性実体』の産物である。この『実体』の普遍的变化が、俗に『物質』と呼ばれるものを形づくる」(Pléiade, t.XI, p.684)。また、個々人の能力に応じて「実体」の吸収度が違うと考えられていた。

にはそうとは気づかれずに、彼を医者にみせました。医者が夕食にやって来て、食卓で彼を観察しましたが、それは病人を診察する素晴らしいやり方です。そして医者は、治療法を処方し、患者の正気の様々な局面に応じて変化を見つけました。化学者の母親、妻、義理の父が彼に、イギリスの薬局方の恐ろしい薬を、彼の知らぬ間に、彼に吞ませました。あなた方は恐らく、イギリスの上流社会には、監禁されていない狂人が多く存在し、「奇人」と呼ばれていることをご存じないでしょう。それは、奇妙な考えを持った人のことです。この化学者は、社交界の名誉あるお飾りの中に収まっていたのです。(アイルランド人が頷く) しばらく、彼のことは置いておきましょう。ロンドンの別の地区で、哀れな男が狂人になりました。しかし、彼は恐らく、政治に首を突っ込んだ靴屋と同じ立場だったので、精神病院に入れられ、公的に治療を受けさせられました。「奇人」になるには、金持ちでなければならぬのです。この男は自分の体内に、もう魂が感じられないと言うのです⁸⁷。彼は、自分の魂がある施術師の手中にあるのが見え、その施術師が彼から魂を取り出し、実験をするために、それを広口瓶の中に入れてと言って、その実験の数々を描写するのでした。彼によれば、魔術師が彼から、かくかくしかじかの能力を取り上げ、話す力を奪い取ったために、彼は口をきけないでいました。そして、言葉をイメージによって構成し、色づける力が奪い取られたために、彼にはもはや観念が存在しなくなり、沈黙するようになったというのです。次に、超自然的な力が彼に強制して、命令された感情を表すように仕向け、彼は怒りだしたり、愛や宗教、政治やジャガイモの話をするのでした。ついには彼は、見知らぬ者に奪われた思考の様々な要素を名付け、それらを分析しました。そうした事は、医者たちには狂気の極みのように見えたのでした。彼らは恐らく、セインツの一味だったのでしょう。この男は、

87 魂を失った男の話は、バルザックの *Aventures administratives d'une idée heureuse* の中にも出てくるが、その出典として、Fargeaud は、1834年1月11日号の雑誌 *Vert-Vert* を挙げている。そこには『魂をなくした男』という表題で、魂をなくしたと思い込んで、魂を取り戻すために人を殺した男がロンドンのベッドラム精神病院に収容されたという話がのっている。

ませんよ。しばらく前ロンドンにいた時のことです。死者を呼び戻す才能で有名な貴婦人がいると、人々は私に信じ込ませようとしてましたが、それは、異常嗜好に関係したイギリス流の冗談でした。もし私の鼯鼠のホフマン⁸⁴、あなた方はまだご存じないですが、まもなくここで皆と同様に、一世を風靡するだろうと思われるベルリン生まれの男なのですが、件の物語作家が、この出来事を知っていたならば、『くるみ割り人形』、『蚤の親方』、『砂男』、『こびとツアイス』に匹敵するような傑作が生まれたでしょう。この天才の思い出が私の心をかき乱すのです。だから私は、黄経局⁸⁵年鑑を執筆した一人の天文学者⁸⁶と同じ正確さで物語ることにしましょう。ロンドンに滞在中、一人の数学者兼化学者、要するに百科全書派に出会いました。彼は全てを知り、少々の数学の知識すらあったのですが、彼が私に次のような話をしたのです。（グロドニンスキーがショーエルンに疑わしそうな視線を投げかける）その頃、ロンドンには狂人だと噂されるイギリス人の化学者がいました。というのも、彼は思考について実験を試みようとしていたからです。彼は思考を光輝き、従って、生き生きとした、重さを量ることのできない流体の性質を帯びていて、ちょうど電気のようなのですが、電気よりももっと感知しがたい実体とみなしていました。（フィジドールに向かって）あなたは、この学者にご満足なのではないでしょうか。彼はあなたのなさっているような探究にかなりのめり込んでいました。ロンドンで、彼がどれほど狂人とみなされることになるか、ご想像がつくことでしょう。だから、彼の家族は、彼

84 Ernst Theodor Amadeus Hoffmann (1776-1822) : Königsberg 生まれ (バルザックがベルリン生まれとしたのは間違い) のドイツの作家。数多くの幻想小説を書き、フランスには1830年 Loève-Veimars の翻訳によるホフマンの作品が出版され、ロマン主義の作家を魅了し、ホフマンが一世を風靡した。バルザックもその影響を受けたが、ホフマンの作品 (*L'Archet du baron de B.*) を掲載した *Le Gymnase* は、彼自身の印刷所で発行された。ホフマンは実際は平凡な司法官として人生を送ったが、彼の作品から作者が歪曲して解釈され、ホフマンは悪魔にとりつかれ、病院で狂人として死んだという噂が当時まことしやかに流れていた。

85 フランス革命時代に創設され、天体暦、航海暦、航空暦などの作成にあたった機関。

86 黄経局年鑑を編集した天文学者で、バルザックとも親しかった François Arago (1786-1853) を指している。

サの後、共謀者たちはこの部屋に集まり、机の上に椅子を乗せて裁判官席を作り、重罪裁判を真似ました。法廷の端には、黒で張りつめ、おがくずを敷きつめた断頭台があり、次に、台所から失敬してきた肉切り包丁が腰掛けの上に置かれ、その下に、悲劇で使う銀紙で覆った木刀が隠されていました。生徒監に最も不満のある者たちがそこに黙って、みじろぎもせずにはいました。犠牲者がもっともらしい口実で連れて来られ、この法廷の前に引き出されると、彼は恐ろしい衝撃に襲われました。生徒たちは訓示をして、彼にこれは重大であり、自己弁護しなくてはいけない、特に外部へ助けを呼んでも無駄であることを仄めかしました。彼らは、マットで塞いだ入口を彼に示し、断頭台と肉切り包丁を見せ、その傍には死刑執行人の役割を演じる体のとても大きな生徒が立っていました。そして彼に、彼を縛るロープや、目隠しのためのハンカチを見せ、死刑の場合は、首切り役の生徒が、その役目を巧みにやってのけるだろうと保証しました。生徒監は黙ったままで、生まれつきの唾のように無言でした。生徒たちは、彼のだんまりを、強い男の示す態度だと思い込みました。従って、訴訟が予審に付され、被告は自己弁護するよう促されましたが、彼は一言も言わず、何の身振りもしませんでした。法廷は彼に死刑を宣告し、彼に後悔しているかどうか尋ねました。無言！生徒たちは、将来もっと優しくなり、もっと人間的になることを彼に約束させ、そうすれば彼を赦免するつもりでした。無言！従って、彼は頑なな罪人とみなされました。生徒たちは彼を縛りました。無言！目隠しをし、断頭台の前に跪かせ、頭をその上に載せました。彼はされるがままになっていました。死刑執行人役の生徒が、厚紙の刀を取り、彼のうなじをちょっと軽く叩きました。それから生徒たちは、哀れな男を揺り動かしましたが、彼は微動だにしませんでした。彼の身を起こそうとしましたが、彼は死んでいたのです。それは、恐ろしい事件となりましたが、もみ消されてしまいました。20人の若者が事件に巻き込まれていて、全員を吊るすわけにはいきませんでしたし、その上、高官の子息たちも混じっていたのです。検死官が調査をした結果、この男は途中で死んだことが証明されました。

グロドニンスキー：木刀！あなたの暗示は直接的ですね。

チャーエルン：私にも話があります。あなた方の話は、私の足元にも及び

らないくらいでしょう。

テオフィル：そういうことならば、多分、フィジドール博士の役に立つような、ある出来事⁸²をお話しましょう。それは、前世紀末に、ダブリンのトリニテ中等学校で起こった話で、父が当時そこにいたのです。あなた方は皆、中等学校を出られたわけですから、生徒たちが彼らの暴君の何人かに対して抱く憎しみが、どれほど激しいものか、おわかりでしょう。トリニテに、罪を問われた者たちを鞭打ち、独房に閉じ込め、夜、監視する処罰担当の男がいたことを知っても、あなた方は驚きはしないででしょう。彼は愚かにも、生徒たちと非常に仲が悪く、彼らから毛嫌いされていました。生徒たちと彼の間の戦いはひどくなる一方でした。彼は彼らを校庭や寮で不意打ちし、様々なやり方で彼らを苛めました。生徒たちは彼に対して何もできませんでした。彼は、太って背の低い、死刑執行人の顔つきをし、一度も笑ったことがなく、コリントのデニス王⁸³のような男でした。おそらく前世は、初期のキリスト教徒を苦しめた、あのローマの皇帝の一人だったのでしょう。彼にたちの悪い悪戯をすることしか、皆、念頭にありませんでした。とうとう、上級生たちが、彼を怖がらせ、彼が判決を実行する折の冷酷さを正すことができるようなお芝居を考え出しました。イエズス会士たちは、休みの間、芝居を演じることを許可しておりました。生徒たちは、舞台装置や衣装、上演に必要なあらゆる資材の置いてある劇場の後ろの部屋で、何度もリハーサルをしました。この場所は、監視が決して行われることのない一種の聖域でした。というのも、役者は最も分別のある生徒の中から選ばれたからです。生徒監に対して演じることになった芝居は次のようなものでした。ある日曜日、ミ

82 *Revue britannique* が1843年8月に、「Le tribunal secret」という題のもとに、Edimbourg の Sainte-Marie 中等学校で起こった、似たようなエピソードを *Fraser Magazine* から転載している。Fargeaud は、バルザックがこのエピソードを他の新聞記事で読んだか、Nacquart 医師または Chapelain 医師から話を聞いた可能性を指摘している。

83 Denys II : 古代イタリアの都市シラクサの暴君。若い頃、プラトンに師事したが、プラトンがギリシアに去った後、暴政をしく。紀元前343年シラクサから追われてコリントに逃れる。1794年8月23日に、パリの芸術座（オペラ座）で *Denys le Tyran, maître d'école Corinthe* というオペラが上演された。

いるのです。

フィジドール：この話はジャック・クレマン⁷³、ラヴァイヤック⁷⁴、ダミアン⁷⁵やクレベール⁷⁶の暗殺者、オランジュ公⁷⁷の暗殺者、サンド⁷⁸、ルーヴェル⁷⁹の話⁸⁰に通じますね。

テオフィル：思考が光、香りや電気のように物質的であるとするならば、それは、神に対する反証⁸¹になるでしょうか。

グロドニンスキー：いいえ、私たちは、地上の全ての種同様、自分でもよくわからない行為を成し遂げる職人に過ぎないと、せいぜい結論づけねばな

73 Jacques Clément (1567-1589) : 狂信的なドミニコ会修道士で、アンリ 3 世を暗殺した。

74 François Ravallac (1578-1610) : 様々な職業を転々とした後、神の啓示を受けて狂信的な神秘思想家となる。アンリ 4 世が法王に戦争をしかけていると思い込み、神とカトリック教会のために国王を暗殺した。

75 Robert-François Damiens (1715-1757) : 従僕として様々な家に仕えた後、ルイ 15 世の乱れた治世に抗議するために、国王にナイフで切りかかった。その罪で、拷問を受けた後、四つ裂きの刑に処せられた。

76 Jean-Baptiste Kléber (1754-1800) : フランスの将軍。オーストリア軍に入隊しトルコと戦った後、フランス革命中は Mayence の防衛で名を上げ、Vendée で反革命軍を相手に活躍、ナポレオンに従ってエジプト遠征に参加した。カイロで Soleyman という狂信者によって暗殺される。

77 Prince d'Orange, comte de Nassau, Guillaume I^{er} (1533-1584) : オランダの貴族。宗教改革派の立場に立って、スペイン国王 Philippe II に対し抵抗運動を行う。デルフトで、狂信的なカトリック信者 Balthazar Gérard によってピストルで殺される。

78 Karl-Ludwig Sand (1795-1820) : ドイツの熱狂的な愛国者。ワーテルローの戦いに志願兵として参戦。愛国的な秘密結社 Burschenschaft に属し、それを誹謗するパンフレットを書いた Kotzebue をナイフで刺し殺した。

79 Louis-Pierre Louvel (1783-1820) : ワーテルローに従軍し、ナポレオンの敗北に立ち会う。ブルボン王家を皆殺しにするという固定観念から、シャルル 10 世の第二子ベリー公爵を殺害。

80 ここに挙げられた者は全て狂信者で、彼らの行為は、バルザック固有の哲学思想：「思考の物質性 (la matérialité de la pensée)」を実証づけるものであると、バルザックは考えている。Cf. 「ルイ・ランベールは、狂信の様々な作用について考察した結果、次のように考えるようになった。すなわち、我々が感情と名付ける観念の集合体は、ある流体が物質的に進み出したのかもしれない。その流体は、人間が生み出し、量の多少は、それぞれの生活環境で、人間の諸器官がその発生物質を吸収するやり方如何によって変わる。」(Louis Lambert, Pléiade, t.XI, p.678)

81 ルイ・ランベールも、「物質が思考能力があるからといって、何故神が滅びねばならないのだろうか」(Ibid., p.653)と問いかけている。『人間喜劇総序』でも、バルザックは、同様の問い掛けをしている。

彼の髪のために幾つもの櫛を持ってきて、支払い済みなので、どうしてもその櫛を彼のところに置いていきたがりました。ある時には、無邪気なお針子、門番に対してあまり悪気のないお針子が、彼にマッカーサーの油⁷⁰の瓶を届けに来ました。彼が髪の中の維持のために、きのう買ったものだというのです。若い画学生の一人は、門番を真似て、彼の前に、髪のある瓜二つの人間を出現させて喜びました。彼の故郷から送られてきた、価格表示書留めの書状を郵便局まで取りに来るよう通知を受け取って行ってみると、そこには鬘が入っていました。画家たちは、彼を糾髪症⁷¹患者だと思い込んでいる医者、を彼のところに寄越しました。というのも、彼らが医者を騙していたのでした。毎朝画家たちはアトリエに着くと、気の毒な老人にはない髪の中の話で、彼の傍まで行く新しいやり方を捜し出しました。とうとう、老人は別の地区に住まいを探さざるを得なくなってしまいました。そこでも当然のことながら、彼らは違うやり方で彼を迫害しました。人々は彼に、どうして髪を失ったのか尋ね、彼の過去の人生について奇妙な噂が広まりました。どうやら禿頭のせいで、モン・ブラン通りの素晴らしい家から彼が解雇されたというのが、確実なように見えました。彼が屈した最後のからかいは、恐ろしいものでした。画家たちは、禿の男の隣の門番女に、もし彼女が彼に、2週間後には立派な髪の中の毛が生えると断言して、養毛クリームを使うよう説得できたら、10ルイやろうと約束しました。画家たちに操られた門番女は、手始めに、彼に結婚の話をしました。彼が、人生で初めて愛情を寄せられたと思っただ恋愛の真っ只中で、婚約者の心は、彼の髪の中の毛次第であることを知ったのでした。今ではこの男は気が狂い、ビセートル精神病院⁷²にいて、空想の髪の中の毛を梳いて人生を過ごしています。というのも、彼は髪の中の毛があると信じて

70 当時、実際に、イギリスから輸入されてパリで売られていた養毛剤。バルザックは、『セザール・ピロトー』でも言及している。

71 もつれた髪にシラミ、埃、脂肪性分泌物が膠着した状態。バルザックの主治医のNacquart 医師等が関心を持っていた病気で、『現代史の裏面』でも、この病気の患者が出てくる。

72 パリの南2キロの所にある、13世紀に建てられた城で、当時、養老院、救済院として使われると同時に、精神病院として使われていた。ビセートルという言葉は、シャラントン同様、狂気を表す代名詞となった。

した。彼らは騙されて激怒し、彼の拳骨と呪いの言葉にたっぷり仕返しをし、その結果、殴り合いが起こるのでした。門番は喧嘩腰になり、疑い深く陰鬱になりました。彼が猜疑の目で見ない者は一人もなく、そして彼は、一体どうしたのかと尋ねる下宿人たちにも、彼よりもっと人付き合いの悪くなった家主にも、自分の恐怖をあえて告白する勇気がありませんでした。毎日、通行人たちは彼の窓のところではやし立てました。「ああ、素晴らしい髪！ほら、ふさふさした髪の男だよ！」見知らぬ者が「髪の毛」という言葉を発するや否や、門番は警戒心を起こすのでした。そんな状態にまでなった時、ペテンは限りないものとなりました。画家たちは、骨董品の愛好家で、非常に裕福なイギリス人に、門番がナポレオンの髪の毛を持っていると思い込ませました。そのイギリス人が、気の毒な禿の男に、髪の毛の話をしに行った時に起こった勘違い騒動は恐ろしいものでした。というのも、それまでは、この気の毒な老人を迫害する者は、彼の軽蔑する画家たちに限られていたのですが、いまや金持ちの連中が彼めがけてやって来るようになり、上流社会の人々がこぞって、彼の頭に押し寄せてきたからです。ある年配のご婦人は、この老革命家がルイ16世とマリー＝アントワネットの髪の毛を所有していると信じ込まされて、供回りの者を連れて、彼の持っている髪の毛を是が非でも売ってくれと頼みに来ました。その場面は全く滑稽でした。というのも、老人は「ああ、奥様」と言って泣きだしたからです。彼女は王党派が感動してほろりとなったのだと思って、次のように答えました。「あなた、たった一房で結構です。私はあなたから全てを取り上げようとは思っていませんから。」ある朝、彼は家の前を掃くために起きだしてきた時、戸口と通りに、一山の切り髪を見つけました。その髪は、画家たちが床屋から買い上げ、彼の住まいから車よけの隅までばらまいたものでした。何人もの人々が「どうやら髪の毛を切ってもらったようですね」と彼に言いました。通行人たちは「あいつには、髪の毛があったんだ！」とはやし立てました。別の日には、数人の若い男たちが彼に、脱毛予防液を、あたかも彼が預かっているかのように所望しました。彼が怒りだそうとすると、彼らは彼の住まいの窓の貼り紙を指さしました。悪事の天分が、これほど様々な拷問を編み出すアイデアに富んだことはありませんでした。ある時には若い店員が、気の毒な老人に、

て知らされました。その噂はその界限で、秘かに広がっていきました。芸術家たちはそれぞれ順番に薬を買いに店に行っては、その若者と薬剤師をじろじろと見つめました。夜には店の前に人だかりが出来るようになりました。そのペテンがあまりに巧みになされたため、薬剤師は店を売って、その地区を離れざるを得なくなりました。芸術家たちは、彼の新しい住居を調べ、そこで彼の引退の理由を説明しました。気の毒な薬剤師は、この恐ろしいペテンに追い立てられて、田舎に行くことを余儀なくされたのです。彼が身の証をたてようとするや否や、その話を聞いている人々は、薬剤師の回りくどい言い方に刺激されて、笑いだすのでした。私があなた方にお話をしている現時点では、彼の妻は、どうしたらいいのか殆どわからない状態です。家主に対してなされた復讐から鑑みて、門番がどんな拷問にあわねばならなかったか、きっと予測がつくことでしょう。ある朝、床屋の丁稚が極めて無邪気な態度でやって来て、その禿の老人に是非とも髪の毛を切らせて欲しいと言いました。老人はそれを冗談とみなして、かつら屋をからかいました。その夜、かなりちゃんとした身なりの若い男が、年老いた靴屋は確かに、この家の門番かと尋ねた後で、彼に自分を大いに楽しませてもらえればたっぷりお礼をする、ちょっとしたことをしてもらえればいいんだ、と言って門番の好奇心をかき立て、彼の貪欲に火をつけました。そして、禿の老人が一体何のことかと尋ねると、その青年は彼に、髪の毛を一房頂きたいと頼みました。今度は門番は怒り出しました。青年は冷静な言葉使いでその怒りをかき立てました。彼曰く、事を収めるためにも、髪の毛を少しくれる方がずっとてっとり早いだろう、門番はそれを嫌がっているのだ、と。門番の怒りが絶頂に達した時、青年は立ち去りました。その言葉は、門番に対してペテンが企てられたアトリエの近隣の幾つかのアトリエにも伝わりました。それ以来、一日に3、4回、極めて巧みに考えだされた口実のもとで、誰かが訪ねてきては、彼に髪の毛について尋ねるようになりました。まもなく、冗談が重なっていききました。激怒し、怒り狂った門番は、彼の髪の毛を話題にする者に対して、体罰を加える権利が自分にはあると思うようになりました。画家たちが、誰か嫌な奴を嫌な目に会わしたいと思う時には、モン・ブラン通りの門番の所に彼を送りこみました。しばしば門番は、気難しい連中と争うようになりま

に悪ふざけをする奴で、グリモ・ド・ラ・レニエール⁶⁸のような男でした。グリモは、木の義手をしていて、パレ＝ロワイヤルのカフェで、ある厳寒の冬の日、ストーブの煙突が真っ赤になっている時それにしがみついて、粗忽者が彼の真似をして、手を火傷するのを見てやろうとしたのです。彼はブルジョワに対して、あなた方がナメクジに対して抱くのと同じ位の敬意しか持っていませんでした。芸術家は友達の所に着くと、家主と門番へ復讐してやると宣言しました。画家と、絵のレッスンを受けにきていた文学者は、熱烈に彼の立場を支持しました。3人のスイス人の誓い⁶⁹のパロディがなされ、彼らは、圧政に苦しむ者の復讐を厳かに誓いました。家主に起こったことを、ついでながらお話しておきましょう。この家主は、かなり裕福な薬剤師で、フォーブール・サン・トノレ街に店を構えておりました。使用人のうち、とても可愛い若者が一人いて、その物腰は殆ど女性的と言えるものでした。3人の陰謀家たちは、この状況をうまく利用して、復讐を企てました。家主のセインツ的な考えについて一旦情報を得るや、彼らは、彼の宗教の核心を突いて攻撃したのです...

テオフィル：勇敢な者たちよ！

本屋：彼らは、この薬剤師の丁稚の田舎の両親を見つけ出し、父母に匿名の手紙を送り、そこで、彼らの息子と主人との親密な関係についての疑惑を匂わせました...

テオフィル（もみ手をして、話したそうにする。その悪戯が、とてもイギリス的な冗談に思えて、たった一言しか口にできない）：吊るせ！吊るせ！

本屋：いや、ここではないですよ。薬剤師の妻もまた、夫の不品行につい

68 Grimod de la Reynière (1758-1838) : 有名な美食家。裕福な徴税請負人の家に生まれる。*Armanach des gourmands* を出版。民衆作家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌやルイ＝セバスチャン・メルシエと親しかったが、フランス革命に際して反革命の立場を取り、共和主義者の二人とは袂を分かった。先天的な四肢欠損症であったと言われ、義手をつけていた。

69 1307年、スイスがまだオーストリアの支配下にあった時、3人のスイス人 (Arnold, Furst, Stauffacher) が、Waldstetten 湖のほとりに集まって、祖国の解放のために命を捧げることを誓った。Guillaume Tell の勇敢な行為がその口火を切った。彼らの誓いにインスピレーションを得て、画家の Steubel (1788-1856) が絵を描き、1824年のサロンに出展、評判を呼んだ。

たんだ。彼女は、この気の毒なフェリエロが妻の貞淑に満足して死のうとしている時に、自分の不実を告げにくるのだ。バイロン卿は、彼女を夫に忠実な妻とすることで、偉大な着想を持っていたというのに。

チャーエルン：それは、俗悪なものではありませんでしたよ。

テオフィル：あなた方フランスの詩人は、その点について、才気をひけらかしてしまっただけです。ところで、彼らはその不幸な夫人のように振る舞ったのです。瀕死の私の父から、私に抱いていた好意を奪ってしまったのです。あの破廉恥なセイッツたちは、黒服をまとったヒキガエルのような奴らで、自分の妻を愛で押しつぶし、言葉には毒を含み、謹厳で、神を後ろ楯に自分の利益を守ろうとし、沼の石のように冷たく、美德の神々しい花を中傷しに来るのです。

グロドニンキー（テオフィルの肩を叩きながら）：だから、私たちは時々、ちょっとした speech（スピーチと発音せよ）をするのだらう。

本屋：門番は、画家が階段で、まっとうな人々にいろいろ迷惑をかけていると言って、大成功を収めました。彼曰く、画家先生は、自宅に汚らわしい女たちを連れてきています。2階に住んでおられるお宅のお嬢さん方は毎朝、コルセットもつけていないふしだらな女たちに、階段で出くわしているのです。画家の友達も騒々しい連中で、踊り場で煙草を吸ったり唾を吐いたり、朝の2時、3時に帰って、建物中の者を起こしてしまうのです、と。芸術家は、強制立ち退きという厳罰に処せられ、家具は差し押さえられ、追い出されて、友達の一人のところまで仕事をする羽目になりました。その友達は優れた画家で、彼を泊めてくれました。そのアトリエには、2人の有名人の卵、偉大な画家と文学者がいました。文学者の方は、あなたのお話のブージュのような男でしたが、才気煥発で、神学校に身を投じることなどできそうもありませんでした。しかしながら、彼はあまりに遊び暮らし過ぎて、今後何も作りだすことはできないでしょう⁶⁷。素晴らしいエッセイやコント、寸劇は書けるでしょうが、女が彼の命取りとなることでしょう。画家の方は、冷酷

67 『幻滅』に登場するルストーやリュシアン・ド・リュバンプレを思い起こさせる人物像。

に足りないスカパン⁶²やクリспан⁶³、ラフルール⁶⁴よりはるかに下なのですが、人々がそれぞれ、悪魔について抱く考えによって拡大され、格上げされてしまったのです。ともかく、これほどの幸運は、凡人には絶対に起こりませんよ！しかし、タッソー⁶⁵のほうがファウストよりも素晴らしいことは心に留めておいて下さい。そして、お互いにそれについて話し合ってください。話を続けて。

本屋：あなた方は恐らく、芸術家と門番という、この2つの気質がしっくりいくとお思いかもしれませんが、全く逆で、互いにぴったり合うどころか、衝突したのです。両者の間に起こった秘かな戦いにおいて、まず、門番が勝者の側に立ちました。芸術家が屋根裏部屋で多額の出費をし、ちゃんと身を落ちつけるために借金すらしした時に、門番は、家主に芸術家の悪口を吹き込み、2期分家賃をためているこの気の毒な画家の弁済不能を述べ立てました。その家主は、(彼はアイルランド人を指さしながら、聴衆に意地悪そうな一瞥を投げかける) 一種のイギリスのセイントツのような人物だったので...

テオフィル：スペインの異端審問官より酷い偽善者で、優しげな顔で毒を持って来てこう言うんだ。「ねえ君、これは君のためだよ。」僕の父を心穏やかに、幸福に死なせる代わりにやつらは、ポルト・サン・マルタン座で最近かけられた『マリノ・ファリエロ⁶⁶』に出てくる総督の妻のようなことをし

62 Scapin：イタリア喜劇に源を発し、モリエールの喜劇 *Fourberies de Scapin* (1671)で有名になった、腹黒い従僕役。

63 Crispin：イタリア喜劇の出てくるずる賢い従僕で、1650年から1750年にかけて、フランスの多くの芝居に登場した。

64 Lafleur：正直な従僕の典型だが、影の薄い役回りで、とりわけ Regnard の戯曲によく登場している。

65 Torquato Tasso (1544-1595)：イタリアの詩人。*Jérusalem délivrée* が有名。

66 ヴェニスの実在の総督 Marino Faliero (1278-1354) の悲劇的なエピソード(若い美貌の妻を侮辱され、その復讐をはかるために、政府転覆の陰謀を企て処刑された)をもとに創作した、バイロンの5幕物の韻文劇 *Marino Faliero* から、Casimir Delavigne が作り上げた5幕物の悲劇で、1829年5月30日にポルト・サン・マルタン座で上演された。バイロンは、ファリエロの妻を貞淑な妻の鑑として描いたが、Delavigne は、劇的效果を増すために、不実な妻に仕立てた。

的地位を取り戻す希望を砕いてしまった権力全体に対する、恐るべき憎しみを覆い隠していたのです。この秘かな感情が、彼の存在を激しく揺り動かしていました。というのも、新聞を読むことで、この1793年の信奉者は、あらゆる政治的局面に通じていたからです。彼の内に隠された心の動揺は、彼の送っている生活と同様に、彼をすっかり消耗させてしまったのです。彼の住まいは小さく、妻もなく、たった一人で、カナリヤを唯一の伴侶として生きてきました。頭には一本の髪の毛もなく、額と顔は深い皺が寄り、それが非常に特徴的であったため、画家ならば、彼ほど「時の神」にうってつけのモデルを見つけることはできなかつたでしょう。溝を掃いている時のこの老人ほど風変わりで、凄味のあるものは、未だかつて見たことがありません。靴下がぴったりしていないために、古い黒の半ズボンの下から膝の一部が見え、あちこち繕った上着を身につけていました。黒絹の縁なし帽は、頭をうまく隠しきれず、すっかり禿あがり皺の寄った顔を、苦虫を噛みつぶしたような表情と共に、さらけ出していました。そこには抑えられた怒りと、悪魔的な不満がはっきり現れていました。この家の6階に、一文無しの若い芸術家が住んでいました。彼は、ベリー公爵夫人⁶¹の庇護を受けていましたが、彼女のおかげで金持ちにはなりそうもありません。彼は、悪魔の血をひいたような男で、その上、(チャーエルンの方に向いて)あなた方ドイツ人が、メフィストフェレスに与えるようなマスクと驚くほど似ていたのです。

チャーエルン(話を遮って)：あなたは、我が国の偉大なゲートに与えられた栄誉が、ある日突然生み出された仕組みをうまく言い当てましたね。彼の成功は、皆が自分なりのメフィストフェレスを作り上げることからきているのです。この人物は、実際は、あなた方フランスの芝居に出てくる、取る

61 Marie-Caroline de Bourbon-Sicilie, duchesse de Berry (1798-1870) : 両シチリア国王フランソワ1世の娘。ルイ18世の甥で、シャルル10世の第2子、Charles Ferdinand de Bourbon, duc de Berryの妻。1820年に夫を暗殺され、1830年の7月革命によって、息子の即位の可能性を断たれた彼女は、ルイ・フィリップに対し、1832年にヴァンデの反乱を起こすが、失敗した。

今、犯罪人たちに、まっとうな人たち以上に多くの楽しみをもたらそうと取り組んでいます。パリの家主の非人道的な行為に抗議する者は誰もいないのです。彼らのせいで、一個の人間が、ひどい悪臭を放つ牢獄の中で、身体機能に影響を与え、関節硬直を引き起こすような仕事をして生きることを余儀なくされているのです。だから、気の毒な門番たちは、彼らを脅かす病気と戦うために、いろいろな方策を講じて彼らの生活を活気づけようとしています。ある者は花を栽培し、ある者は鳥や犬を可愛がります。お国の博愛主義者たちは、全く、物理的側面における同情しか持っていないのですよ。

チャーエルン：しかし、知性というものは自分の面倒は自分でみないと駄目なのです。

グロドニンスキー：人類はお金をかけるだけの値打ちが果たしてあるのでしょうか。ここから太陽まで3300万里⁵⁹あり、太陽の光は5分で私たちのところに到達します。この小さな光の伝達の速さにもかかわらず、ある惑星は天空にあまりに高く位置していて、その光はいまだに、私たちのところに届いていません。そして、このような星が無数にあるのです。その中で、一人の門番とは一体何でしょう、全人類といえども一体いかほどのものなのでしょうか。

テオフィル：バランシュをお読みなさい。しかし、その門番は放っておきなさい。ラファエルをそんな立場に置いて、抗しがたい激しい思考に委ねてご覧なさい。一体、どうなるのでしょうか。彼は一週間で気が狂ってしまうでしょう。

ラファエル：グロドニンスキーの論理を台無しにしないで下さいよ。

本屋：モン・ブラン通りの門番には、人生において偉大な瞬間があったのです。彼はかつて、一つのセクション⁶⁰を取り仕切り、もう少しでひとかどの人物になるところだったのです。彼の一见、平穏な生活は、かつての政治

59 1億3千2百万キロメートル。現在の測量では、太陽と地球の距離は1億4千7百万（1月）～1億5千3百万（7月）キロメートルで、光の届く時間は、5分ではなく、8分。

60 フランス革命期の自治区。パリでは、48のセクションが設けられ、民衆（＝サン・キュロット）の革命運動の拠点となる。

は82歳で、先程皆さんにお話ししましたように、私はきのうパレ・ロワイヤルで、のみ色の絹の素晴らしい綿入れ外套にくるまった彼に出会ったのです。

本屋：私は皆さんに、今のお話にも匹敵できるように思える、最近起こったばかりの、人をまんまとかついだ話をいたしましょう。ねえ、ラファエル、私の話を記事に書いてもいいよ、百エキュの価値があるよ、君。だけど、君は文学者ではないから、豚に真珠だな。もし君が作家になろうという野望を持っているのなら、飢え死にしてしまうよ。モン・ブラン通り⁵⁶に36年間、同じ紐を引いて戸を開けてきた門番がいたのですよ。だいたい58歳頃で、革命をそっくり経験し、その限界では、彼は最も過激な行為に加担していたのではないかと疑われていました。その上、彼はマラーやロベスピエールを鼻屑にしていることを隠しはしませんでした。靴屋を生業とし、彼は善良な門番がそうであるように、サント＝ペリヌ養老院⁵⁷のしかるべき場所で一生を終えるはずだったのですが、その時、思いがけない出来事が起こって、彼の門番、靴屋、革命派としての人生を狂わせたのでした。

テオフィル：あなた方生理学者たちは、6ピエ平米（約4㎡）の箱の中で生活せざるを得ない人が行き着く退化現象に思いを馳せたことがありますか。その箱に日の光があたるのは、湿った正面玄関の下の戸口からだけで、その戸口は家の溝や道路の溝の高さにあり、殆どいつも、階段下の物置の床によって、6、7ピエ（約2m）の高さに区切られているのです。お国の博愛主義者⁵⁸たちは

56 現在の Rue de la Chaussée-d'Antin。Fargeaud によれば、門番の話は1829年に、ウージェーヌ・シューがアレクサンドル・デュマ等と共謀して、Pipelet という門番の窓の下で« Portier, je veux / de tes cheveux! »と歌い、門番が最後には発狂したエピソードに基づく。この事件は当時の新聞を賑わした。

57 シャイヨーの元聖アウグチス会修道院に設立され、次に rue Chardon-Lagache に移転された養老院。1806年に、元雇用人、元官吏やかなり裕福な人々のために作られた。入居するには、宿泊代を払うか、かなりの額の入居料を予め払わねばならなかった。

58 バルザックは、『そうとは知らずの喜劇役者』や『ベアトリクス』の中でも、博愛主義者たちが、黒人の解放や囚人の境遇改善ばかりを説き、門番や雇用人のひどい境遇に気づかないことを批判している。彼は、1845年の『人間喜劇総カタログ』の中で、今後執筆予定の作品として、*Le Philanthrope* を挙げているが、結局書かれなかった。そのモデルとして、Fargeaud は、監獄の環境改善に力を尽くした Benjamin Appert や、セーヌ県監獄総視察官 Louis Moreau-Christophe を想定している。

ましたが、「なあに、あなたに茶番劇をお話しますよ」とブージュは言うばかりです。そして笑い、ゲームをするのでした。ブージュは、妻の傍で寝て一晩過ごせるような策略（というのも、彼女は明らかに酔っぱらっているのですから）を思いついたことに自画自賛して、真夜中に戻ってきました。ところが、彼女が本当に死んでいるのを見て、恐怖にとらわれました。ガヴェ医師を呼びにやり、彼に事の顛末を話しました。ガヴェは奥方の手を取りながら彼の話の話を聞いていましたが、脈拍も呼吸も見出せませんでした。彼は鏡をとり、唇に近づけましたが、息は全くありません。病院の外科医長を呼んで診察を受け、そして私も駆けつけました。死の全ての兆候が我々の眼前に現れていました。四肢の硬直、蒼白、体温の低下、そして腐敗。しかし、ラザロ⁵⁵に起きたように、これらの兆候が死ななくても現れるような例もあるので、我々は皆一致して待つことにしました。死んだことに疑いの余地がなくなった時、ブージュは解剖を要求しました。死体解剖は細心の注意を払って行われましたが、どんな厳密な観察をしてみても、何の死因も明らかにできませんでした。どこにも病巣は存在しなかったのです。トカイワインは完全に消化されており、脳は全く無傷でした。神経系も解剖し、ルーペで観察しましたが、どんなわずかな炎症の跡も見つけられませんでした。腸も完全な状態で、私たちのうち誰もどうして命がなくなってしまったのか、死がどこからもたらされたのか言うことができませんでした。恐怖は時には、その影響がはっきり目に見えるような支障を引き起こすことがあります。髪の毛が真っ白になったり、脳髄に鬱血が起こったり、つまるところ、おわかりでしょう。しかし、神経中枢にもどこにも何もなかったのです。ブージュは神学校に身を投じ、司祭になってしまいました。妻の財産はレシュヴィルに与え、自分の財産は不幸な人々への援助のために残しておきました。彼は聖母の無原罪の御やどりを信じています。彼は最近、司教になるのを断りました。というのも、後悔の念に浸りきって生きているからです。彼は自分のことを殺人者とみなしています。その罪は法律には定められていないのですが。彼

55 聖書の聖ヨハネ伝にある、ラザロの復活。死後4日目にキリストによって蘇った。マルセイユ初代司教になったと伝えられる。

領地⁵³を造った人ですよ。

ファンタスマ（話の続きを語る）：それは、世襲ワインと呼ばれる、あの古いワインの一つでした。一瓶で3、4ルイし、一杯飲んだだけで、大の男を酔っぱらわせることのできるものです。ブージュには、胃がかっーと熱くなるようなワインが必要だったのです。彼は妻の部屋に入っていく、彼女が観念し、罪の償いとして命を捧げる覚悟ができているのを確認しました。彼女はブージュに、レシュヴィルを決して咎めだてしないよう懇願しました。ブージュは仲間のおどけ者が一杯食わず時取る、真面目な風を装って自分の役割を演じました。妻はトカイワインを飲み、横になりました。彼は、彼女をそのままにして、親しげに彼女におやすみを言い、額にキスをしました。そして、召使いに奥様のところに彼女の室内履きと夜の身繕い一式を持っていくようにと、まさしく大貴族らしく命じました...

チャーエルン（話を遮って）：リーニュ大公⁵⁴はある朝、妻の愛人に出会って、大声で笑いながら「ねえ君、君に一杯食わせて、彼女と一晚過ごしたよ」と言ったんだよ。

ファンタスマ（再び話を続けて）：12年間の無関心の後の、この夫婦の和解の印に、館中が大騒ぎとなりました。それが夜の8時で、ブージュは真夜中にしか寝に帰るつもりがなかったので、議長の所に玉突きのゲームをしに行きました。10時に家の者が度を失ってやって来て、彼を捜して、奥様が恐ろしい痙攣で死にそうで、中毒症状を起こしていると彼に告げました。ブージュは笑いだして、「結構、結構。毒は私の流儀だ」と言いました。そして、彼はゲームを続けました。11時に彼の召使がやって来て、妻の死を告げました。ブージュはまた笑って言いました。「彼女は死ぬほど酔っぱらっているかもしれないが、酔っぱらって死ぬことはないよ。」「でも、行ってごらんなさい。誰が生き、誰が死ぬかなんてわからないのだから」と議長が彼に言い

53 Sophiowka : Potocki のウクライナの領地。

54 Eugène Lamoral de Ligne, prince de Ligne (1804-?) : ベルギーの政治家。1830年にベルギーがオランダから分離した後、Léopold 国王治下の外交官として、イギリス、オランダ、フランス、イタリア、ロシア大使を歴任した。バルザックは『結婚の生理学』においても、同じ逸話に言及している。

た。その事件は偽りのものではなく、私がおその事実を確かめました。シャルル9世は、ココナス⁴⁷と公爵夫人の情事を暴いて、公爵に、不意打ちに乗じてこのイタリア貴族を殺してしまうよう頼んだのでした。バラフレ公(=ギューイズ公)は、夫人に毒が入っていると思ひ込ませたブイオンを彼女に飲ませ、復讐の代わりに彼女の恐怖を見て喜んだのです。ブージュは起き上がって、重々しい沈痛な面持ちで言いました。「マダム、あなたの聴罪司祭を呼びなさい。一日中、信心の務めをなさい。そして、今晚、キリスト教徒らしく死ぬ用意をなさい。」更に付け加えて「とりわけ、私が全く悩まされないような表現で遺書を書きなさい。」哀れな妻は夫の手に接吻をし、そこに涙を流しました。ブージュの神経には、あまりにもメタリックな流体しか流れていませんでしたので、心を動かされることもなく、家を出て、友達の一人のところで朝食を取り、一日中賭け事をし、仲間に夕食をおごりました。それから、トカイワイン⁴⁸を一瓶携えて家に戻りました。そのワインは、ビュフォン⁴⁹とディドロの友達のブロス議長⁵⁰の所からもらったもので、議長は、ポトキ伯爵⁵¹とかいう人から、このワインを一駕籠受け取っていたのです。

グロドニンスキー：あの「美しきギリシア女⁵²」の夫で、ゾフィオウカの

47 Annibal de Coconas : カトリーヌ・ド・メディシス治世下の頃、フランスに一旗あげにやって来たイタリア人の伯爵。いわゆるルコンタンの陰謀にラ・モール等と加担し、1574年に共犯者と共に捕らえられ、処刑された。

48 世界的に有名なハンガリー産ワイン。特に甘口の貴腐ワインが有名。

49 Georges Louis Leclerc Buffon, comte de (1707-1788) : 博物学者、王立植物園総監。36巻にのぼる *Histoire naturelle universelle* を出版した。バルザックは『人間喜劇総序』の中で、社会的な環境の違いに応じて異なる人間像(兵士、職人、弁護士、学者、政治家、聖職者など)を「社会種」と定義し、ビュフォンが「動物種」で行った分類、体系づけを、「社会種」に対して行うと宣言している。

50 Charles de Brosses (1709-1777) : 有名な行政官であり、人文学者、作家。彼の碩学、雄弁、仕事にける熱意を国王に買われて、ブルゴーニュ議会の初代議長に任命される。学者や文人の知己が多く、碑文・文芸アカデミー会員として多くの著作を残した。とりわけ、*Lettres historiques et critiques* が有名である。

51 Stanislas-Félix Potocki (1745-1803) : ポーランド人の伯爵。

52 Potocki の2番目の妻 Sophie のことで、彼女は« belle Grecque »または« la belle Phanariote »と呼ばれた。2人の間には娘がいて、この娘が後の Kisseleff 夫人。

込んでいました。かつて、女性がこれほど多くのものを一人の男性に犠牲にしたことは一度もなく、従って、これほど激しい快樂を味わったことはありませんでした。彼女の情熱が深い沈黙に包まれていること、少しもその痕跡を残していないという確信、そして夫の長きにわたる無関心が、彼女のかすかな慰めでした。ブージュは妻のことを殆ど気にかけていなかったもので、少しも彼女を疑いませんでした。その上、例え誰かが、館の左棟で起こっていることを彼に告げに来たとしても、彼はそれを聞いてとても喜んだことでしょう。結婚や妻の義務に対する彼の考えを友達は皆知っていました。ブージュ夫人だけが知らなかったのです。あなた方は「奴は馬鹿な男だ、怪物だ、それとも切れ者だ」と言うかもしれません。なあに、そんなものでは全くなかったのです。すぐおわかりになりますよ。ある晴れた朝、彼の召使いが、午前5時という突拍子もない時間に彼を起こして、奥様がどうしても部屋に入れて欲しいと懇願されておられますと申しました。ブージュはとても驚いて、妻を部屋に入れることに同意しましたが、彼女だとわからないぐらいでした。それほど、彼女は変わり果てていたのです。その顔は青ざめ、眼には隈ができ、彼女の中の何もかもが、深い改悛の思いと幾晩も泣き明かした深い傷痕を示していました。哀れな妻は、夫のベッドの足元に膝まずき、そこで、すすり泣きながら押し殺した声で、どうやって死ねばよいか命令を頂きに参りましたと言いました。ブージュはベッドの中で飛び上がり、彼の一番望んでいることは、妻の幸せを見守ることで、死についても、彼女が長寿を全うするのが自分の望みだと申しました。妻はさめざめと泣き崩れました。それほど、夫の善意が彼女を驚かせたのです。彼女は夫に、まもなく子供ができると告白しました。哀れな夫人が涙と屈辱的な告白で消耗しきっている間、ブージュは毛布の下に沈み込んで、顔中に広がる笑いの発作に気づかれないようにしました。彼は、その時ギュイーズ公爵にまつわる事件⁴⁶を思い出しまし

46 François de Lorraine, duc de Guise (通名 le Balafre) (1519-1563) : オルレアンでポルトロ・ド・メレによって殺害される。『哲学研究』の『カトリーヌ・ド・メディシス』における重要な人物。彼の妻 Anne d'Este (1531-1607) は、Ferrare Hercule II公爵と Renée de France の娘。ここで話題にされているエピソードの出典は不明。

いましたが。ブージュ（おかしな名前じゃないですか）はとても人がよく、よく笑い、大変愉快な人でしたので、誰も彼の妻に対する振る舞いを責める者はいませんでした。通常、このような奇妙なことは、どこか体が悪いからなのだとすることで片づけられていました。というのも、この気の毒な女性は不平一つも漏らさなかったのです。彼女には、夫の後を追いかけて回すのは何かしら汚らわしいことのように思えたのです。彼女は金持ちで、秘かに善行を施していました。ブージュもまた、秘かに善行を施していました。彼はエプロンが好きで、あらゆる召使女たちに言い寄っていたのです。私はこれほど仲の良い夫婦を見たことがありませんでした。7年の間で、一度も諍いが起こりませんでした。実のところ、彼らはたまたま一緒に出掛ける時か、更にまた時として、それぞれが別々に到着した舞踏会においてしか、出会うことがなかったのです。ブージュ夫人が30歳の時、ブージュの従弟のド・レシュヴィル氏を自宅に迎え入れることになりました。彼は海軍主計官ボダール・ド・サン＝ジャム氏⁴⁴の会計係でした。振替手形に対する商法上の厳格な判例のせいで、主人が破産したために、この御仁はパリを離れることを余儀なくされたのです。ブージュは妻に話し相手を提供できるととても喜んで、彼を自宅に住ませました。レシュヴィルは言わば、きざな男（プティ・メートル⁴⁵）で、退屈しのぎにブージュ夫人に惚れたのです。しかし、信心深い女性の抵抗が、いたく彼の気紛れを煽り、一種の情熱の性格を帯びることになりました。その戦いがどれほど続いたと思いますか。4年ですよ。よろしいですか、革命前にですよ。ブージュ夫人は、まさに世の中で最も幸せであったが故に、最も不幸な女性でした。彼女には美德があり過ぎたために、後悔せずには快樂を味わうことができず、自分は永遠に墮落してしまったと思

44 Bodard de Saint-James（むしろ Bodard de Sainte-James で知られている）：ルイ14世治世下の海軍主計官。当時、國務諮問会議の秘書であった、バルザックの父が関係していたため、サン＝ジャムの倒産について、バルザックはよく知っていた。『カトリーヌ・ド・メディシス』、『人生の門出』においても彼について言及している。

45 プティ・メートル（petit maître）という名は、フロンドの乱の頃、コンデ公の支持者たちが、国の支配者（maîtres d'Etat）になりたがったために、彼らにつけられた名で、それが後になって、凝った身なりや女性に対するうぬぼれの強い物腰で注目を浴びる若者に使われるようになった。

ファンタスマ博士：きのう会ったんですよ、ノミの外套に...

本屋：それは雄かい、雌かい？

ファンタスマ：それで私は思い出したんですよ、個人的な知り合いに関わるある事件を。それは、(フィジドールに向かって)あなたが一昨日、我々に展開してくれた学説にあてはまりそうなのです。あなた方は、ブージュ神父の話聞いたことがありませんか、彼は司教代理... ええっと、どこのだったかな。昔の司教区のうち、今も残っているのは全然思い出せない。まあいいさ、問題は彼に関する事なのだから。およそ40年前、件のブージュは、俗に言う享楽主義者だったんです。つまり、あたかも私たちの誰もが生まれつき、または経験によって、エゴイストではないかのように、エゴイストと馬鹿者どもに名づけられている者のことです。自己の忘却は、一種の墮落です。彼は、宗教思想を全くのお笑い草だと思っていたせい、または自分自身の快楽を除けば全てどうでも良かったためか、自分の気に入ることしかしませんでした。結婚していましたが、子供はおらず、家に妻をたった一人で残し、彼の考えにもその行動にも束縛されないようにしておいたのです。「ねえ君、散歩にいきたまえ。君のしたい事をしたまえ、平穩に暮らそうよ！」奥方は屋敷の一棟に、旦那は反対側の棟に住んでいました。ブージュには友達が沢山いました。だから、彼はしょっちゅう田舎に行ったり、賭け事をしたり、狩りをしたり、勝負事をしたりして時には6、7カ月、家を留守にしたものです。冬には、彼はいつも町で食事をし、明け方の2時、3時に帰宅し、自宅がとても嫌だったので、友達を食事に招待する時は仕出屋の所で部屋を借り、そこで彼らを迎えました。愚か者には奇妙に思えるかもしれませんが(学生たちが飛び上がる)、彼の妻は若くて美しく、とても感受性が強く、ディジョンの老婦人達すべてを合わせた以上に信心深かったのです。要するに、彼女は感情そのものだったのです。ブージュはと言えば、水も泥も換えようとはつゆ思わず、同じ池の中でばちゃばちゃ歩くような動物的な男で、あの田舎者らしい粗野な喜びに満ち溢れていました。奥方は最初のうちは、彼を愛しました。夫に構ってもらえなくなると、宗教の腕の中に飛び込み、神様が夫を引き戻して下さるのを待ったのです。夫の方は、神様のことなど歯牙にもかけませんでした。時々、罵り言葉の中では神様を対象にして

てきたのですよ。それをどうやって切り抜けたかご存じで？。勇気を振り絞ってですよ。あなたは仕事のし過ぎなんです。あまり仕事をやり過ぎては駄目ですよ、そんなことしたって何にもできませんよ。ひとかどの者になる人は、思索に興じたりはしません。悪いやり方だ。

グロドニンスキー（ファンタスマのゲームを見ながら）：あなたは6を2個持っていて、1個はチャーエルンが先手として出し、残りはタロン⁴⁰にあるのだから、到底勝てませんよ。

フィジドール：計算に対抗できるのはもう、トリックトラック⁴¹、ルーレットにクラブス⁴²の3つのゲームしかありませんね。

グロドニンスキー：その通り。それらのゲームでは、人は偶然と戦うことになるのです。他の全てのゲームでは、かなりの数の勝負が行われてきましたが、科学が必ず勝利を収めています。

チャーエルン：偶然に立ち向かうことに、何かしら偉大さを感じませんか。

グロドニンスキー：偶然は、まさによくは理解されていない一つの力であり、それは私たちには未知の、世界を動かすある力の運動の総体を表すものです。ゲームをする人は、ティタン⁴³なのです。

本屋：偶然が存在しないならば、それでは、神が存在するということですね。

チャーエルン（笑いながら）：神は2人います。悪魔はどう扱うのですか。

40 各人に配らずに残ったドミノは裏返しにしたまま一個所にまとめて集めておくが、それをタロンと呼ぶ。自分の番になっても場に出せるドミノが無い時、そのプレイヤーはタロンから、出せるドミノを引き当てるまで引く。

41 盤すごろく。BC2700年頃のエジプトのセネットと呼ばれるゲームに溯る。双方7個ずつ合計14個の駒を使用し、正六面体のサイコロを同時に3個振り、その数の分だけ柁目の上で自分の駒を進め、全部の駒を先にアガリまで持っていった方が勝ち。セネットでは、各柁目には絵（「死者の書」の物語から取っている）が描かれていたが、ヨーロッパに伝わり、次第に柁目のデザインが変化して三角形になったものがトリックトラック、バックギャモン、タビュラなど多くの名前と呼ばれるようになった。

42 ハザード賭博と呼ばれる中世に溯るダイスゲーム。18世紀にイギリスで流行し、craps と呼ばれたが、フランスでは creps と綴られた。2個の賽（ダイス）を振って、その合計が7または11ならば勝ち、2, 3, 12ならば負けになるなど、特定の数の組み合わせが勝敗のポイントになる複雑なゲーム。

43 Titans：ギリシア神話で、オリュンポスの神々より以前の巨人族の神。ゼウスと戦ってタルタロス（地上界）に落ちた。巨人、超人をさす。

第8番目の対話³⁹

(1827年12月、夜10時半)

2人の学生がオデオン座から出てカフェ・ヴォルテールに来る。学生①：「彼らの話をこれから聞けるよ。彼らも駆け出しではないが、最強なのはやっぱり、ロシア人だ。」学生②：「やせた方の人を、医学部で見かけたよ。」学生①：「僕は、一番若い人と一緒に、ジェラルバあさんの店でいつも食事してるよ。」学生②：「アイルランド人はあのリュルイユの奴を手に入れて本当に幸せだな。今晚、彼女は何てきれいだったことだろう。」学生①：「彼は彼女に月3000フランやってるんだよ、君。俺たちなら多分、ただで彼女をものにするのにね。」彼らは黙って、哲学者たちのテーブルの隣のテーブルに座る。

グロドニンスキー：相変わらずじめじめしたこんな天気、今までなかったことだ。冷え込みはいつ始まるんだろう。

テオフィル（時計を取り出す）：11時、あと30分ある。（学生たちは顔を見合わせる）

ファンタスマ：6のダブル（両側の目が同じもの）！私が先手だ。

フィジドール（アイルランド人に向かって）：あなたの愛しいリュルイユ嬢の今夜の演技は素晴らしかったですね。ボーイさん。いつものレモネードを。私があなただったら、彼女のボックス席で、例え彼女が舞踏会用のドレスを身に纏っていても、私なら...

テオフィル（赤くなりながら）：ああ、先生。それは紳士的ではありませんよ。

本屋：今晚は、皆さん。ラファエル君、どうしたのかね。落ち込んでるみたいですね。落ち込まないようにしましょうや。私は、何度も逆境を経験し

39 Fargeaudは、この対話に結論としての性格を持たせるために、「第1番目」とせずに「第8番目の対話」としたと推測している。

エルが何か立派な作品を制作中ならば、彼を食い物にしようと、彼が何を制作中なのか知りたがっている。ドミノの先生。60歳。修辞学の教授のような風貌。栗色の服、はしばみ色のズボン、黒のチョッキ、シャツにダイヤモンドを一個つけ、セーム革の手袋をはめている。率直で開けっぴろげな様子。弱々しい声。飲んだり飲まなかったりする。

学生たち：出たり入ったりする端役。カフェでは無言だが、通りではカフェで聞いたことを盛んに議論する。

ボーイ：オデオン座がはねた後、11時半から「哲学者たち」が出ていくまで椅子の上で寝込んでいる。

め。連合法³⁴の撤廃を望み、オーコンネル³⁵とモア³⁶を熱愛している。モアは当時まだ貴族側に鞍替えしていなかった。一晩に5フラン費やし、芝居の後、リュルイユ嬢が舞台衣装を着替えている間はここに来る。フランス語を流暢に話し、どんな教会にも行かないが、宗教的信条は持っている。オデオン座の女優、リュルイユ嬢に止めを刺された肺病病みで、彼女に対して彼は1827年に3000リーヴルの年金を残した。カフェのボーイたちに人気がある。明るい、気品のある声。

本屋³⁷：ディドロの百科全書の最初の本屋であったブリアソンの店の元店員で、当然のことながらディドロ先生の共同執筆者たちとも面識があった。ランド氏³⁸と親交があったため、無神論者でなければならぬと思いついでいる。1790年から1815年にかけての不幸な時期を、4度の無申告破産をしょいこんで過ごしたため、手形の支払いを怠る輩に対して、苦々しい思いで文句を言う。ムードンに別荘がある。どんな思想にも驚かず、本を一冊も開けたことがなく、24パーセントで手形の割引をし、実業界に通じ、事業のアイデアを沢山持っているが、何の事業も企てることはない。他の者の後押しをして事業を起こさせ、コンサルティング代を徴収する。反骨の人とみなされ、何かにつけて理屈を言い、文学者に素晴らしい忠告を与える。もしラファ

34 1800年に布告されたイギリスの法律。これまで別々だった、グレートブリテン島（イングランド、ウェールズ、スコットランドを含む）とアイルランドの議会を一つにまとめるもので、オーコンネル等アイルランド側がこの不公平な法案の撤廃を求める運動を起こした。

35 Daniel O'Connell (1775-1847) : アイルランドの政治家で、カトリック信者の愛国主義者。連合法の撤廃を求める運動を生涯にわたって繰り広げた。

36 Thomas Moore (1799-1852) : アイルランドの詩人。自作の詩に曲をつけた *Irish Melodies* を1807年に発表し、それ以降トーリー党や摂政皇太子を揶揄する詩を書き有名になる。1823年に *The Loves of the Angels* を発表。そのフランス語訳が同年に出版され、フランスで大成功を収める。バルザックは、『娼婦盛衰記』でもモアに言及している。

37 モデルとして、バルザックの本を出版し、4回の倒産を経験した Louis Mame の名が挙げられる。Fargeaud は、この人物描写の中に、数々の本屋によって搾取されたと思いついでいるバルザック自身の個人的な恨みを見ている。

38 Joseph-Jérôme de Lalande (1732-1807) : 天文学者。とりわけ無神論者で有名だった。1750年頃、Voltaire, Maupertuis, La Mettrie 等とプロシアの宮廷に滞在した。

トゥルノン通りのジェラルバあさんの店²⁹で、1食21スーの食事を取る。そこは、階段を2段降りた1階にある。23歳。健康的な顔、金髪、青みがかった眼、やせていて貧弱。知識に対して貪欲で、知識を鵜呑みにしてしまう。何でも知っているファンタスマを崇め、一つの体系を思索するフィジドールを大いに尊敬し、グロドニンスキーの前で平伏し、彼を神のように崇め、穏やかで愛想のよい、機知に富んだジョーエルンに共感を抱いている。何も飲まず、いわゆる「哲学者たち」のテーブルからは、何も受け取ろうとはしない。カウンターにでんと構えている女神に眼を上げることができない。さしあたっては、年収600フラン、将来は100万長者。簡単に信じては騙され、懲りずに新しい嘘に再び取りつかれる。お人好しであると同時に炯眼、実戦では打ち負かされるが、テントの下では勝利者。太くこもった声。

テオフィル・オルモン³⁰：アイルランド人でとてもバイロン風。長い首、手入れの行き届いたネクタイ、イギリス女性の顔色。極端に慎重でコパイバルサム³¹療法をしている。とてもエレガントな服装、薄い腕時計、小さな鼻眼鏡。半時間を爪の手入れにかける。当時はまだ無名のバランシュ³²の熱狂的支持者。イギリスを憎み、とりわけ、お茶と聖書の会に誘うイギリスの Saints³³（セインツと発音せよ）を憎んでいる。セインツ派の若い叔母のせいで、彼は父の相続権を剥奪されてしまったのだ。紳士である彼にとって気の毒なことに、彼女が彼の悪口をさんざん言いふらし、特に、ジュリア・マーマデューク嬢という婚約者がいるにも関わらず、あるフランス人の女優のもとに彼の二輪馬車をよく見掛けるという理由で、彼を悪漢扱いにしたた

29 バルザック自身、1824年から26年にかけて rue de Tournon に住み、ジェラルバあさんの店に足繁く通った。

30 Fargeaud によれば、バルザックやウージェーヌ・シュアの遊び友達であったダンディ、Auguste Sanegon (1807-1835) がモデル。リュルイユ嬢は、ヴォードヴィルの実在の女優 Adeline Wilmen がモデルとされる。

31 南米のコパイフェラ属の植物から得られる樹脂で、性病の治療に用いられる薬。

32 Pierre-Simon Ballanche (1776-1847)：神秘主義的哲学者。輪廻の思想を政治・社会的システムに応用、歴史の循環、進歩による可能性を説いた。

33 18世紀前半に John Wesley によって創設された、実践的福音主義と生活上の厳格な禁欲主義を特徴とするメソジストのセクト。

チャーエルン²⁴：ドイツ人。形容しがたい性格、時にはバラードのように臃気で、時にはデュピュイトラン²⁵のように実証的で、カントには容赦なく、クーザン氏²⁶を辛辣な風刺詩の鞭で手厳しく非難する。ヴォルテールとボーマルシェを合わせたよりも機知に富み、霊の存在を信じている。靈感者のように通りを彷徨い、気が向けば皆のように馬鹿になる。グロドニンスキーを驚きの眼で見つめている。秀才と天才の間で、どちらの性質も持った男。詩人、偉大な政治家にも関わらず、「自由」というラベルが貼ってある瓶の中に入った、様々な人間の愚行を擁護している。大胆にも『ファウスト』はまぐれ当たりだと言っている。金髪の国ドイツそのものの金髪の青年で、星のように輝く眼をしている。惚れっぽい。気圧計や温度計の変化に応じて、時として信じやすかったり、何も信じなくなる。フィジドールとラファエルを非常に愛し、ベイル²⁷の辞書式に、批評を重視するファンタスマのことを心配している。年齢不詳、ジャーナリスト風の服装、柔らかく澄んだ、小さな声。

ラファエル²⁸：コルディエ通りの6階に住む。復活祭からクリスマスまでは南京木綿のズボンで、冬には毛足の長いラシャのズボン。金メッキのはげた金のボタンのついた青いチョッキ、キャラコのシャツ、黒いネクタイ、紐つきの、被せのついた靴、雨で光った帽子、オリーブ色のフロックコート。

24 Fargeaud は、彼のモデルとして、ドイツ人医師 David-Frédéric Koreff 博士 (1783-1851) と、ドイツ人の新聞記者でフランスに Hoffman を紹介した一人である François-Adolphe Loève-Veimars (1801-1854) の二人を挙げている。

25 Guillaume Dupuytren (1777-1835)：パリ大学医学部、病理解剖学専門の外科医。

26 Victor Cousin (1792-1867)：哲学者。折衷主義の代表者。ソルボンヌ大学で哲学を講じ、フランスにカント哲学を紹介した。バルザックも、1816年にソルボンヌ大学でクーザンの講義を聞いた。

27 Pierre Bayle (1647-1706)：啓蒙主義者。ベイルの *Dictionnaire historique et critique* (1696-97) に関して、バルザックはしばしば『人間喜劇』の中で言及している。

28 『あら皮』の主人公 Raphaël de Valentin。初稿では Moi となっていてバルザックの分身と言える存在。

グロドニンスキー¹⁹：リトアニア人。出生地及び年齢不詳。数学者、化学者にして発明家。住居は不明、大食漢で大酒飲み。深刻な顔つきは陰険にすら見えることもある。ホメロス、ヒポクラテス、ラプレー、シェイクスピアのように、本物の肖像画が存在しない偉人たちに対して人が思い浮かべるような美しい額をしている。北方人種特有の蒼白い顔、雄牛のような体格。身なりはあまり気かけず、長年の使用のため、少し油じみた、その上更に髭で擦れた黒いネクタイ。堂々たる風采、丁寧な物腰。迫害された不遇の人間特有の諦めの念が浮かんだ青い眼。ジョフロワ・サン＝ティレール²⁰を称賛し、彼がキュヴィエ²¹より勝っていると言明して、アカデミーと一戦交えた。彼を偉大な天才とみなす者もあれば、抜け目のない法螺吹きとみなす者もある。お金のかかる空想癖²²を持っていると思われる。フィジドール、ファンタスマ、本屋やその他諸々に恭しく迎えられ、彼らが彼の気づかぬうちに彼の飲食代を払っている。一種のダライ・ラマ²³だが、真の哲学者であるため、俗悪なお世辞にも超然としている。要するに、現代のプラトンで、その師ソクラテスにあたるのが誰なのかは不明。バリトンの美しい声。

19 ポーランド人の数学者、神秘主義者、発明家の Hoëné Wronski (1778-1853) がモデルとされている。初稿ではグロドニンスキーをポーランド人に設定していた。

20 Geoffroy Saint-Hilaire (1772-1844)：博物学者。全ての動物において、構造の一致が認められるとし、「構造の単一」(l'unité de composition) に基づく進化論を唱える。1830年科学アカデミーにおいて、キュヴィエとの論争が起り、キュヴィエ側の勝利に終わる。ゲーテ等の文学者はサン＝ティレールの理論を支持する者が多く、バルザックも『人間喜劇総序』でその理論を拠り所にして持論を展開している。(cf. トビー・A・アベル『アカデミー論争』西村顕治訳、時空出版、1990年)

21 Georges-Léopold-Chrétien-Frédéric-Dagobert de Cuvier (1769-1832)：博物学者。比較解剖学の創始者。動物の各部分における類似を認めながらも、種間の差異を強調し、ジョフロワ・サン＝ティレールと対立した。

22 数学を研究するかたわら、形而上学に魅かれた Wronski は「絶対」(l'Absolu) を発見したと主張、それを数学に適応しようとした。彼の「絶対」の秘伝を受けた弟子の Arson は師の研究費用を負担し、莫大な借金の肩代わりをしたが、1817年に突然支払いを拒否。そのため、Wronski は弟子に対して訴訟を起こした。世論は前者を詐欺師扱いした。バルザックはこの訴訟問題に関心を寄せ、彼の『絶対の探求』はそこから一部、着想を得たと考えられている。(cf. Madeleine Fargeaud, Histoire du texte de *La Recherche de l'Absolu*, Pléiade, t.X, pp.1566-1569)

23 チベット仏教ゲルク派の法王。

「下から雷に打たれる」と呼んでいる。いつもけばだった状態の、11フランのシルクの帽子を被っている。裾の広い角ばった服。大きなタバコ入れを持ち、始終出し入れするため、チョッキの左ポケットがいつも綻びている。おなじみの貝殻と銅の鍵を端につけた、鋼の鎖つきの懐中時計。鼻と顎がくっつきそうな顔、共和派風の頬髭、週に2度髭をあたってもらう。ブーヴァール博士¹⁵の友達で、かつてメスマルやデロン¹⁶に味方した一派の一人。その為にいまだにパリの医者たちの嫌われ者になっている。陽気でよく笑い、ごちそう好きで、モンテスキュー通りの定食用テーブル（ターブル・ドット¹⁷）— そのテーブルにつける女性についてはあまり気難しく言われないと疑われている — で夕食を食べる。38年前からコンデ通りの家¹⁸に住んでいる。そこは、ポーマルシェがヴィエイユ・リュ・デュ・タンブルに移る前に住んでいたところで、そうした事を彼はしばしば話の種にしている。73歳、背が高く太っている。白髪交じりの長い髪の毛を、頭の下から額まで寄せ、ぴったりなでつけている。しかし、その髪は、非常に暑い時には滑稽なほど、てんでばらばらになってしまう。ブドウの葉のように皺が寄っている。自分の情熱について論じるが、艶福については語らない。逞しい体つき、的確な判断をし、頑固で、全てを読破し、全てを考察してきた。彼を見て、弟子が思わず言いかけた「間抜けな老いぼれ」という言葉も口許で呑み込んでしまう。一晩でたった一杯のエスプレッソを飲むだけ。朗々たる声。

15 le docteur Bouvard : 『ユルシュール・ミルエ』に登場するメスマル主義者で、ミノレ医師の古い友達。ミノレは1784年の動物磁気を巡る論争の折にブーヴァールと仲違いをしたが、1829年に、ブーヴァールの誘いで催眠幻視術師の実験に立ち合い、メスマル主義を信じるようになる。

16 Charles Deslon (?-1786) : パリ大学医学部の評議員、王弟アルトワ伯爵の第一主治医で、メスマル主義を信奉したため、同僚の迫害を受ける。

17 table d'hôte : もともとは、ホテルや宿駅などで、店の主人 (hôte) と一緒にお客全員が同じ時間に同じ料理を食べていたもので、主人を囲んで同じ時間帯に同じ料理を食べるものは全て、一流ホテルの定食も、怪しげな酒場の定食もターブル・ドットと呼ばれた。

18 現在の、コンデ通り26番地の家。ポーマルシェはここに1763年から1776年まで住んでいた。今では Mercure de France の建物になっている。

その研究を専門としたいと望んでいる若い医者。27歳、やや上背があり、血色はあまりよくない。生き生きとした灰色の眼。やせていて、指にインクをつけることなど決してない思想家の白い手。栗色の髪にも関わらず、金髪の人特有の顔色をしている。トゥーレーヌ地方のヴィル・オ・ダム生まれ。ヴェルポー⁸、トゥルソー⁹たちと上京。学問を愛し、従って、実践より理論に没頭している。つば広の帽子、青の長いフロックコート、黄色のチョッキ、黒のズボン。財産は殆どなし。ファンタスマ博士の言葉を借りれば、額に死の指が刻みこまれている¹⁰。10時半頃レモナードを一杯飲む。テノールの声。

ファンタスマ博士¹¹：ディジョン生まれ。フランス知識界を熱狂させた動物磁気¹²に関する、かの有名な論争¹³の折に上京。全身黒ラシャづくめだが、服に無頓着なのは一目瞭然。ひどく皺の寄った、擦り切れた古い半ズボンをいまだに着用し続けている。それは折り返しの付いたズボンで、その下に左手を通しながら話をする。ラシャ仕立てのウールの黒靴下、大きな靴。靴の中には、2つの絆創膏の間にブルゴーニュ松脂¹⁴を挟んだ底敷を敷いている。体内の電気が抜け出さないようにするためだが、電気が抜け出ることを彼は

8 Alfred-Louis-Armand-Marie Velpeau (1795-1867) : 当時の著名な外科医。トゥールの病院に勤務した後、1818年に上京。

9 Armand Trousseau (1801-1867) : 当時の著名な医者。1820年頃トゥールからパリに上京。

10 バルザックはこの場面を1827年12月に設定。モデルとされる Georget 医師が亡くなるのが1828年5月なので、実在の人物と虚構の人物フィジドールとの間に確かな類似点が認められる。

11 Fargeaud によれば、メスマルの弟子の Jean-Pierre-François Deleuze (1753-1835) – *Histoire critique du magnétisme animal* (1813) の著者 – がモデル。初稿の段階では「Le docteur Chose」と呼ばれていた。

12 magnétisme animal : オーストリアの医師 Franz Anton Mesmer (1734-1815) が唱えた説。詳細は解題を参照のこと。

13 1784年ルイ16世は、王立科学学士院、王立医学学士院の会員からなる審査委員会と、さらに王立協会会員より成る別の委員会を発足して、メスマルが新物理的流体を発見したかどうかを審議させた。両委員会には、天文学者バイイ、化学者ラヴォワジエ、医師ギョタン、アメリカ合衆国駐仏大使のベンジャミン・フランクリン等当時第一級の科学者が入っていた。委員会は、磁気流体が物理的に存在する証拠は全く見当たらなかったという結論を下した。この報告書に対して、メスマル派は激しく抗議し、また反メスマル・キャンペーンも起こる。(cf. ロバート・ダートン『パリのメスマー』稲生永訳、平凡社、1987年)

14 水で溶かし、濾過した松脂。

翻訳 : バルザック
『知られざる殉教者』
『『現代のパイドン¹』断片』

対話者たちのプロフィール

舞台はパリ、オデオン広場、カフェ・ヴォルテール²の奥の部屋。その部屋の窓は、オデオン通りに面し、ソレイユ眼鏡店³の隣にある。毎晩、真夜中まで3、4人の学者たちが、部屋の奥の窓際の「哲学者たちのテーブル」と名付けられたテーブルでドミノ遊び⁴をしている。

フィジドール博士⁵：骨相学⁶、刺激⁷、狂気、精神異常者に興味を抱き、

1 プラトンの対話篇の一つで、魂の不死をテーマとする『パイドン』の現代版をバルザックは書こうとした。

2 バルザックがトゥルノン通りに住んでいた頃(1824-1826)、よく通ったカフェ。学者、詩人、学生たちが足繁く訪れたカフェだが、1956年に B.-Franklin 図書館に変わる。1779-1864年までの通りの呼称 rue Voltaire (現在の Casimir-Delavigne 通り) にちなんだ名。

3 Madeleine Ambrière-Fargeaud (以下 Fargeaud と略す) によれば、当時のパリ年鑑に実際、オデオン広場35番地、眼鏡屋 Soleil fils という名が載っている。

4 ボーンと呼ばれる牌(パイ)を使用するゲーム。ボーンは表面が象牙か骨材、裏面が黒い木で作られ、表面に2組のダイスの目が刻んである長方形の牌28個で一組になっている。28個のボーンを参加者に一定数ずつ配り、まず6と6の目のあるボーンを台の中央に置き、順次に同じ目と目が並ぶように、または並んだ目と目の数が7になるように、縦、横またはT字型に並べて、自分のボーンを全部出し終わった時をドミノといい、勝ちとなる。

5 Fargeaud は、モデルとして Etienne-Jean Georget の名を挙げている。1795年、Touraine の Ville-aux-Dames 生まれ。Velpeau, Trousseau の同僚。1828年に肺結核で死亡。

6 phrénologie : François-Joseph Gall (1758-1828) の唱えた理論。頭蓋骨を検査し、その隆起のある位置によって、患者の持つ主要な能力、本能を知ることができると考えられた。バルザックは『ゴリオ爺さん』など『人間喜劇』の作品において、ガルの骨相学と、ラファーターの人相学にしばしば言及している。

7 irritation : 病理学用語で、感覚や、ある部分の身体器官の活動の異常、過剰現象を指す。

の全体において力を増している。純潔な人々が肉体なり精神なりを必要とする時、行為や思考の力を借りようとする時、彼らは初めて己の筋肉に鋼鉄を見出し、己の悟性に天与の智恵を見出す。その時初めて悪魔的な力、もしくは「意志」の魔法を見出すのである²⁴。

ベットにおいて「処女性」は、「思考」の力を行使する以前の、生命エネルギーが蓄積された状態を意味し、それが「嫉妬」という感情に集中し、体外に放射されると、すさまじい怒りの爆発となって現われるのである²⁵。

このように、『知られざる殉教者』の中で展開される議論は、いわば、『人間喜劇』全体を動かす根本的な思想を凝縮したものである。従って、『知られざる殉教者』は未完に終わっているにも関わらず、バルザックの小説世界にとって根幹をなす作品と言えよう。

* * * * *

バルザックの作品の多くは翻訳がなされてきたが、残念ながら『知られざる殉教者』は日本ではまだ翻訳がなされていない。『知られざる殉教者』は、バルザックの作品世界を深く知るために欠かせない作品だと考え、ここに翻訳を試みた次第である。なお、テキストは Pléiade 版 *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre Georges Castex, t.XII, 1981 に掲載されている *Les Martyrs ignorés* を使用した。翻訳文中の注に挙げた、登場人物のモデルなどに関しては、上記の édition での Madeleine Ambrière-Fargeaud の注及び序文を参考にした。

24 *La Cousine Bette*, Pléiade, t.VII, p.152.

25 ベットがシュタインボックとオルタンスの結婚をヴァレリーから知らされた時の怒りの爆発は、次のように描写されている：「彼女の顔つきは、古代の女予言者もかくありなんと想像する顔に似ていて、カチカチ鳴るのを防ぐために歯を食いしばり、彼女の手足は恐ろしい痙攣で小刻みに震えていた。彼女は鉤型に曲がった手を帽子と髪の毛の間にすべらせ、髪をかきむしり、あまりに重くなった頭を支えようとした。頭は燃えるようだった！彼女の内で猛威を振るう火災の煙が、ちょうど火山の噴火によって掘り返された地割れのような顔の皺から立ち上ってきているようだった。それは崇高な光景であった。」(Ibid., p.145)

えられる「思考」の一撃によって死ぬ運命にある。それは、脳髄に「思考」を集中させることで、脳を世界全体がそこに反映しにくる「同心円の鏡²²」としたバルザック自身の姿であり、彼もまた、「思考」の濫用による発狂の恐怖に脅かされていた。彼は、1832年に『ルイ・ランベール』の初稿が出来上がった後、妹のロール・シュルヴィルに宛てた手紙の中で次のように書いている。

どうして彼のような結末（＝ランベールの発狂）に立ち戻るかって？ 僕がそうした結末を選んだ理由は知っているだろう。君はいつも恐がってきた。このような最期はありうることで、悲しい例がそれを証明してあまりあるほどだ。医者が言っていなかったら、狂気は常にあまりにも働き過ぎる偉大な知能の戸口にあると²³。

このように彼は、メスマルの理論を援用しながらも、実体験に裏打ちされる形で、磁気流体理論を変質させ、新たな意味を付与し、それに基づいて彼の小説空間を創造したと言える。

従って、上記のように、『ゴプセック』や『ウジェニー・グランデ』のような『風俗研究』に属する作品も、こうした「思考」の物理的な破壊作用を抜きにしては語れず、それは『人間喜劇』全体の基盤をなす哲学思想となっている。例えば、バルザックの晩年の作品である『従妹ベット』（1846）において、作者は、ベットのエネルギー的な力の源を彼女の「処女性」（virginité）に求めている。

処女性を保っている個人にあっては、生命力がそれまで節約されてきただけに、計り知れない抵抗性と持続性を持つにいたっている。頭脳は、温存された諸能力

22 バルザックは、『あら皮』の序文の中で、次のように言っている：「作家はあらゆる結果、あらゆる性質と慣れ親しんでいなければならない。彼は自己の内に何かしら同心円の鏡を持っておらねばならず、そこに宇宙が、気の向くままに、自らを映し出しにくるのである。」（Préface de la première édition de *La Peau de chagrin*, Pléiade, t.X, p.51）

23 *Correspondance de Balzac*, Garnier Frères, 1962, t.II, p.89.

み尽くし、破壊」する「滅びの天使」とみなされるのも、もっともなことである。ラファエルが、急速に縮んでいく「あら皮」に恐れをなしてモンドールの山奥に籠り、岩や植物などの自然と一体化しようとしたのは、生命の燃焼をなるべく食い止めるためであった。また『人間喜劇』に登場する守銭奴は、単にお金を出し惜しむ吝嗇家ではない。例えば、典型的な守銭奴であるゴブセックは、朝起きる時間から夕方の咳の発作に至るまで、「振り子時計の規則正しさ¹⁷」に従う、一種のぜんまい仕掛けの人間として描かれている。彼は馬車が通ると、話の最中でも中断して黙り込み、声を張り上げないですむようにした。ゴブセックは「フォントネルにならって、生命運動を儉約し、あらゆる人間的感情を自己に集中した¹⁸」人物であり、余分な生命運動を慎むために、厳しい節制を守る「哲学者」の風貌を伴っている。『人間喜劇』に登場するもう一人の守銭奴の典型、ペール・グランデに関しても「彼は決して物音を立てなかった。全て、動作すらも儉約しているように見えた¹⁹」という件がある。要するに、『あら皮』の登場人物の一人のセリフにあるように、「長生きするために感情を殺すか、情熱の殉教者となることを受けいれて若くして死ぬか²⁰」という二者択一の生き方、言い換えれば、思考なき生の存続か、激しい欲望による生の瞬間燃焼かの選択を迫られているのだ。生の充実感「意志」の集中によってもたらされ、大量の生命エネルギーの燃焼によって、超人的な力を発揮することができる。しかし、「あら皮」が象徴しているように、生の充実は死につながり、生の持続の破壊となる。この二者択一の選択において、ラファエルが結局は機械的な生活に甘んじることができず、ポーリーヌへの抑えがたい欲望によって死んでいくように、真のバルザック的な人物は全て、何らかの情熱に捕らわれ、「短刀²¹」にも喩

17 *Gobseck*, Pléiade, t.II, p.965.

18 *Ibid.*

19 *Eugénie Grandet*, Pléiade, t.III, p.1035.

20 *La Peau de chagrin*, p. 118.

21 「短刀」(poignard) という語は『知られざる殉教者』の中に見出せ、『哲学研究』の序文でもバルザックは Félix Davin を通して「思考」を「人間を破壊する最も強烈な原因」とみなし、人間にとって「思考」は「毒、短刀」となると語っている (Pléiade, t.X, p.1210)。

人的な能力—それ故に悪魔的な雰囲気や霧を漂わせていることがしばしばである—を発揮するが、それと同時に、エネルギーを一度に放出することで、その力を行使する人間自身の生命の源を涸らすことにもなる。自らを「永遠」、「神」と同一視する「百歳の人」ですら、兵士たちを助けた直後は、「顔は蒼ざめ、疲労に押しつぶされ、眼は曇り、(苦痛で) ひきつった顔付き¹⁴」をして現われ、その活力を失っている。彼が何世紀も生き延び、長寿を享受できたのはひとえに、一種の「悪魔の契約」によって、お金や家族の病気の治癒などと引き換えに、他者の「生命流体」(le fluide vital¹⁵)を引き出し、それを自らの内に補給することによってであった。従って、『百歳の人』のような幻想空間で繰り広げられる話とは違い、リアリズムの枠組みの中で生きる人間にとって、自らの「意志」の量は限られたもので、大量のエネルギーを放出した後は、生命流体の消耗、死が待つのみである。『知られざる殉教者』の中の次のような言葉：「生命は、灰で覆わねばならない火なのだ。思考するとは、火に炎を加えることだ」は、『哲学研究』全体を貫く命題であり、『絶対の探求』の中でもバルタザール・クラスが同様のことを述べている。

いかなる生命も燃焼を伴う。炉の活動の強弱によって、生命は長くも短くもなる。だから、鉱物の破壊は無限に引き延ばされる。というのは、鉱物において燃焼は潜在的であるか、隠れているか、殆ど感じられない程なのだから。従って、湿気を生む化合によって絶えず瑞々しくなる植物は、限りなく生命を保つことができる。[...] しかし、自然が一つの器官を完成する度に、また未知の目的のもとに、有機体における顕著な三段階、即ち、感情、本能、知性をその器官に付与する度に、この3つの機能は、ある燃焼を要求する。その燃焼の活発さの度合いは、得られた結果と正比例する。人間は知性の最高点を代表し、人間だけが持つ唯一の器官から、半ば創造的な力である「思考」が生ずる。だから人間において、動物の中で最も激しい燃焼が見られることになる [...] ¹⁶。

ルイ・ランベールはまさに「思考」の濫用によって気が狂い、若くして死んでいったのであり、『知られざる殉教者』で「思考」が「肉体を貪り、飲

14 *Ibid.*

15 *Ibid.*, p.1023.

16 *La Recherche de l'Absolu*, Pléiade, t.X, p.719.

メルはあくまでも医者立場から、患者の治療を目的として動物磁気を考えているが、バルザックの場合は、より想像力を働かせた文学的な観点に立ち、その破壊力の大きさに重点を置いている。『あら皮』におけるラファエルと彼を侮辱した男との決闘場面では、ラファエルが逆光に立っているにも関わらず、彼の磁気を帯びた眼から発せられる光は「人殺しの視線⁹」となって相手の男を倒してしまう。また『和解したメルモス』では、メルモスと「悪魔の契約」を結んだカスタニエは「おれはもう戦う必要はない。おれの望む男を一目で殺すことができるのだから¹⁰」と自分の力を誇示している。このように「磁氣的視線」は専ら、相手を攻撃する武器として、または他者を支配、所有するための手段として使われているのである。

バルザックの作品の中で、メスメル的な磁気治療師 (magnétiseur) として、磁氣的な流体を病気の治癒に役立てた例は唯一、1822年に彼がオラス・ド・サン＝トーバンというペンネームのもとで書いた初期小説『百歳の人、または二人のベランゲルド』に見出されるだけである。主人公の「百歳の人」ことベランゲルド・スキュルダンⅡ世は、難産で、母子ともども死に瀕しているベランゲルド伯爵夫人を不思議な液体で奇跡的に救い、また、ジャファではペストに冒された兵士たちの病を、「恩恵をもたらす流体」(fluides bienfaisants¹¹) でたちどころに治している。そこに居合わせた兵士たちの中で最も大胆な男ですら、「この不思議な人物の体から発せられるように見える支配的な感情」に自らが侵略され、「眼に見えない、深く入り込む流体」によって恐怖が募っていくのを感じている¹²。また、彼の子孫であり息子であるチュリウスが死に瀕している時、突然「百歳の人」が姿を現わし、両手をチュリウスの頭の上に押しつけ、「燃えるような彼の眼から発せられる全ての光の塊¹³」を頭の部分に向けて放つことで、チュリウスを死から救っている。このように、凝縮された生命エネルギーは、肉体的にも精神的にも超

9 *La Peau de chagrin*, Pléiade, t.X, p.275.

10 *Melmoth réconcilié*, Pléiade, t.XI, p.371.

11 *Le Centenaire, ou les deux Béringheld dans Premiers Romans*, Bouquins, 1999, t.1, p.973.

12 *Ibid.*, p.972.

13 *Ibid.*, p.979.

磁気説について詳しく説明していることから、バルザックのメスメル信奉の深さが窺える。メスメルは、フランス革命前夜の1778年にパリで治療を始め、彼の唱えた学説は、フランクリンの電気理論やラヴォワジエの熱理論などの出現で科学熱に駆られたパリで熱狂的に歓迎され、その磁化された治療用の「桶」は一時、大流行した。メスメルは人間の身体には、磁石の特性に類似した磁氣的な流体が流れており、磁石と同じく相異なる対立した磁極が存在すると考え、それを「動物磁気」と名づけた。そして、体内を流れるこの磁気流の均衡が破られた時、器官に変化が起き、様々な病気や障害が生じるとした。彼は、術者の体から放出された磁氣的流体が患者の体内を流れ、激しい痙攣や昏睡などの「発作」(crise)を引き起こした後、患者の磁液の調和を取り戻し、病気を治すことができると主張した。メスメルは『動物磁気の発見に関する論考』(*Mémoire sur la découverte de magnétisme animal*)において、自説を27の命題に分けて要約しているが、その21番目⁸で動物磁気を光、火、電気と同じく、目に見えない微細な流体であるが、科学的に立証可能な物理的存在とみなしている。バルザックの、「思考」を電気や光、火に喩えて物理的現象とみなす考えはまさに、このメスメルの動物磁気説に則ったものと言える。バルザックは更にこの理論を発展させ、体内を循環する磁氣的な流体を一点に集中させ、エネルギーを凝縮したうえで、それを体外へ放射することによって、周りの人間に多大な影響を与えることができるという力学的法則を打ち立てている。そのエネルギーが「眼」に集中すると「磁氣的視線」(le regard magnétique)と化し、それはヴォートランを始めとする『人間喜劇』の特権的人物には欠かせない特性となっている。「磁氣的視線」は、相手を魅惑すると同時に恐怖に陥れ、その力を麻痺させるばかりか、相手の心の奥底まで浸透し、そこに隠された心情を見抜く力をも有している。言わば、「千里眼」の力(バルザックはそれを「第二の眼」と呼んでいる)が授かるのだ。ただ、メスメルと大きく違う点は、メス

8 「この学説は、引力、潮の干満、磁石、電気に関する理論においてと同様に、火や光の性質について新たな説明をもらすであろう。」(K. Melissa Marcus, *The Representation of Mesmerism in Honoré de Balzac's La Comédie humaine*, Peter Lang, New York, 1995, p.106参照)

「本質的な産物⁵」とみなしている。その「意志」の力の原理を探求したのが、ルイ・ランベールと『あら皮』の主人公ラファエル・ド・ヴァランタンで、それぞれ『意志論』（ルイ・ランベールは *Traité de la Volonté*、ラファエルは *théorie de la volonté* と名づけている）を著わしている。このラファエルは、『知られざる殉教者』に出てくる「ラファエル」その人であり、初稿の段階では「私」となっていて、身体特徴や住んでいた場所も当時のバルザック自身と一致するように⁶、作者の自伝的要素が多分に織り込まれた人物である。他方、この作品の中でジョーエルンが物語る、他人の魂を盗んで広口瓶の中に入れ、実験をしていた奇矯な化学者のエピソードは、1834年に *Les Causeries du monde* という新聞にバルザックが掲載した *Aventures administratives d'une idée heureuse* の中の話の再利用で、ここではルイ・ランベールが話の聴き手として登場している。このように『知られざる殉教者』では、ラファエルとルイ・ランベールという、バルザックの分身とも言える二人の人物が密接に関わり、「意志論」の真髓が明らかにされている。

バルザックにおいて「思考」はまず、ちょうど血液が人間の体内を循環しているように、体内を循環する流体—作中のフィジドールや『ルイ・ランベール』の中でルイが「神経流体」(*le fluide nerveux*) と呼んでいるもの—と規定されている。『知られざる殉教者』の登場人物の一人は次のように語っている：「思考は重さを量ることのできない一つの流体で、私たちの体内に循環組織を持ち、その静脈も動脈も持っているのだ。それが、あるただ一つの点に多量に流れ込むと、ライデン瓶のように作用して、死をもたらす可能性がある。」「思考」を、体内を循環する流体と捉える考えは、Moïse le Yaouanc⁷を始めとする多くの研究者が指摘しているように、オーストリアの医者メスメル⁷の動物磁気説 (*le magnétisme animal*) の影響を大きく受けている。実際、『知られざる殉教者』の中にも、ファンタスマ博士というメスメル主義者を登場させていることや、『ユルシュール・ミルエ』で動物

5 *Ibid.*, p.626.

6 cf. Fargeaud, *op.cit.*, p.711.

7 cf. Moïse le Yaouanc, *Nosographie de l'humanité balzacienne*, Maloine, 1959.

殉教者」と呼ばれている一の実例を登場人物が順番に語った後、その理論づけがなされている。この「思考」(la pensée)という語は、『哲学研究』全体のキーワードとなる重要なもので、バルザック独自の特殊な意味が与えられている。彼は、一人の登場人物の口を借りて「様々な情念、悪徳、激しい不安、苦悩、快楽は思考の奔流である」と述べ、「思考」を全ての心理現象を包括するものと定義している。そしてそれは、光や電気のように、重さを量ることができず、目に見えず、触ることもできないが、「生きた力」であり、物理的な力を発揮することができるものである。この「思考」の秘密を探り、それを明らかにすることが、バルザックにとって、人間や宇宙のあらゆる事象を動かす始原の原理(=「絶対」)を究めることに通じていた。彼は、ハンスカ夫人に宛てた手紙²の中で、『人間喜劇』の体系づけを行い、『風俗研究』では感情とその動きを、生とその動態を対象とし、『哲学研究』では生の依拠するもの、人間や社会を存在せしめる究極の原因を考察の対象とする旨を述べている。『風俗研究』で「結果」(les effets)を描いた後、『哲学研究』で「原因」(les causes)を探り、『分析研究』では更に「原理」(les principes)に溯ろうとしたのだ。バルザックは、最も初期の作品で、『分析研究』に分類されている『結婚の生理学』(1829)において既に、次のように述べている。

「思考」の謎の研究、人間の魂の器官の発見、その活力の幾何学、その力の諸現象、肉体とは無関係に動き、望む所に移動し、身体器官の助けを借りずに見ることが出来る「思考」の能力—そうした力を持っているように我々には思えるのだが—の評価、つまるところ、その力学の法則及び、物理的作用の法則を知ることが、人間の学問の宝庫において、次の時代の輝かしい位置を占めるであろう³。

バルザックは『ルイ・ランベール』の中で、「『思考』が発達する『場』(le milieu)⁴」を「意志」(la Volonté)と名づけ、「思考」を「意志」の

2 *Lettres à Madame Hanska*, édition établie par Roger Pierrot, Bouquins, 1990, t.1, p.204.

3 *Physiologie du mariage*, Pléiade, t.XI, p.1171.

4 *Louis Lambert*, Pléiade, t.XI, pp.625-626.

バルザック『知られざる殉教者』

—— 解題と翻訳 ——

村 田 京 子

解題

バルザックの『知られざる殉教者』(*Les Martyrs ignorés*)は、1837年7月に出版された Werdet 版『哲学研究』第12巻、『無神論者のミサ』、『二つの夢』(後に『カトリーヌ・ド・メディシス』の一部となる)、『ファチノ・カーネ』に続いて掲載された。それに先立って1836年6月9日の *Chronique de Paris* に *Ecce Homo* というタイトルのテキストが掲載され、そこではフィジドールがトゥールの年老いた医者を訪ね、彼の告白を聞く場面が描かれており、それが本作品の一部を構成する *avant-texte* となっている。しかしながら、『知られざる殉教者』のテキスト自体が副題に「『現代のパイドン』断片」(*Fragment du «Phédon d'aujourd'hui»*)とあるように、まだ「断片」の状態、いずれ完成するつもりが結局、未完のままに終わった作品である。しかし、Madeleine Ambrière-Fargeaud が指摘しているように¹、1846年の『人間喜劇総カタログ』の中にその名が見出され、バルザックが最後までこの作品を重要視していたことは明らかである。

この作品では、1827年のパリという設定のもとで、プラトンの『パイドン』にならって、様々な国籍の思想家、医者、学者など「哲学者」たちが一堂に会し、「魂」に関する哲学談義が展開されている。その中心テーマとなるのが、プラトンの擁護した「魂の霊性」と対照をなす「思考の物質性」(*la matérialité de la pensée*)で、「思考」のもたらす破壊的な力の犠牲者—何らかの心理的ダメージによって「あたかも雷に打たれたかのように」死んでしまった者で、法律で罰せられない犯罪の犠牲者であるが故に「知られざる

1 Introduction à l'édition Pléiade des *Martyrs ignorés*, t.XII, p.703.